

塚田嘉信氏旧蔵資料に就いて

（私的回想と共に）

本地 陽彦

◎はじめに

塚田嘉信氏の名は、今日では映画研究者の間では、初期映画史研究の画期的著作である『日本映画史の研究』の著者として、或いはそれに先立つ私家版雑誌『映画史料発掘』の発行者として、更には『映画雑誌創刊号目録』全4冊を殆ど自身の蔵書を基礎に編纂したという映画雑誌の膨大な蒐集家として、既に広く知られた存在、と言って良いであろう。「映画研究者」という捉え方が広範囲に過ぎているなら、「映画史研究者」とその対象を絞ってもいいかも知れない。辻恭平氏が『事典 映画の図書』（1989年12月、凱風社刊）の中で、「明治期映画研究の第一人者」と紹介した評価は、歿後30年近く経過する今日でもそのままに通用するであろうか。「第一人者」であることは、氏の著作に接した研究者ならば誰もが認めるであろうが、しかし学者一般にありがちな権威主義とは凡そ無縁の存在であり、同時に俗世間的な肩書等に拘ることを最も嫌っていただいたから、自ら第一人者であると口にすることは勿論、そうした意識さえ持たれていたかどうか。が、いずれにしてもしかし、現代書館という出版社から『日本映画史の研究』が公刊されるまでは、氏の著作は殆んどすべてが私家版によるものであったことから、そうした「第一人者」としての研究さえ広く知られるようになったというのも、その『日本映画史の研究』が発行された1980（昭和55）年11月以降のことであり、更にはその書物に於ける研究の成果がようやく反映されるようになって来た、例えば「映画100年」と位置付けた企画が様々なかたちで取り上げられた1995（平成7）年辺りからであろうか。即ち、その「映画100年」の年の暮れに塚田氏は亡くなられた訳だから、些かその名が広まるには、その研究が正面から取り上げられるには、余りに時間が掛かりすぎたという誇りは免れないであろう。尤もその頃の映画史研究者にとっては「前例の無い」研究の登場と受け止められた筈であるから、即ちそれまでの『映画史料発掘』の読者以外にとっては、『日本映画史の研究』の成果に対する評価にも戸惑いを覚えて、正当な評価以上の研究へと発展させるには容易では無く、謂わばやむを得ぬことではあったとも思える。

私事になるが、氏の生前に親しく接していた一人としては、『日本映画史の研究』発行後も氏の研究、或いは存在が、その発行によってそれ以前と比較して、一気に大きく注目されるようになった、とは見えなかったし、氏自身がこの1冊によって世間から注目されることを期待していた訳でもないように思えた。『映画史料発掘』を再整理して、改めて日本映画最初の2年に限っての、主に新聞記録を中心に調査しての事実の発掘とそれに対する考察で纏められた『日本映画史の研究』だが、或いは密かに大きな反響を呼ぶであろうという期待があったとしても、それ以上に氏にとっては、『映画史料発掘』を再整理して纏め、それを公刊しておくこと。そのことで塚田氏にとっての一つの大きな区切りをつけることで、恐らくは納得していたに違いない。そして、反響以上に期待したのが、恐らくは未知の新たな研究者との出会いと、その出会いによって齎される研究の新たな進展、展開であったのではないだろうか。『映画史料発掘』が部数の限られた私家版であり、しかも内容を十分に読み込めないような半可通な読者の手に渡ることなど意識して拒否していたくらいであるから、氏の期待に応える研究者という存在もまた、どこにでもいるという訳ではないであろうが、著作が全国の

書店店頭と並ぶことで、そもそもが光の当たらぬような研究分野であってみれば世間に知られぬ新たな初期映画史研究者、或いは映画資料・文献の蒐集家との邂逅を、少しは思い描いていたかも知れないとも思えるのである。しかしそれもまた、推測の域を出るものでもない。

では実際に新たな研究者と巡り合えたか、は私も知り得る立場にはなかったが、それでも『日本映画史の研究』上梓後の『映画史料発掘』刊行の再開、つまり『「映画史料発掘」その後』（注・1）の冒頭を、

「『日本映画史の研究』（'80年11月・現代書館刊）上梓後、ありがたいことに、ご同好の方々のご協力を賜わり、さらに次の事柄が判明しましたので補正します。」

と書き出しており、それはそれでまた、上梓の一つの成果と捉えることが出来よう。だがしかし、一方で、少なくとも数多ある出版社、或いは出版の編集者が、映画史研究にとって極めて重要な1冊の登場と受け止め、塚田氏に対して新たな著作の出版を働きかけるようなことまでは無かった。出版業界の売り上げは、まだまだ上り坂を続けていたからそうした動きがあっても何ら不思議では無かった筈だが、一方の映画業界は観客数も映画館数も低迷を続けていた時代であったから、映画文献に食指が動くことも無かったのであろうか。結果として、氏は再び私家版発行に取り組み、且つ、自身でタイプを打ち、製本も手作りになった為とその発行部数も極端に少部数であった。それらの私家版を著すには膨大な資料の所蔵が背景となっているであろうことも、従ってその部数に見合ったような僅かな研究者だけが想像するだけであった。塚田氏の所蔵する映画史資料、映画文献の全容は、鉄のカーテンに仕切られたにも等しく、殆ど誰も知るどころが無かったのである。

再度、個人的なことを記せば、氏のご自宅を訪問するようになって親しくお付き合いをするようになって、私からお願いをして資料を見せて頂くことは一度もなかった。そもそもそういう発想が無かったこともあるが、氏自身が資料を大切に扱い、保存にも努力を払われているであろうことは、その態度からも感じられたし、私がお見せする為には持参する文献、資料も、実に慎重な扱いであり、仮にもし何か見せて欲しいものがあっても、そんな要求を安易に言い出せる雰囲気も無かった。それはその後もずっと変わるところが無かったのである。更に付け加えれば、親交を重ねる中で、当時は私が映画資料、文献の蒐集を書物（単行本）に重点に置いているのを見て、「あなたは雑誌は買わなくていいですよ。雑誌で調べることがあれば私が自分のもので調べてあげますから。」とまで言って下さっていた。私の時代からでは、例えば戦前、戦中の映画雑誌を揃えることは勿論、ある程度の冊数が纏まって古書として売り出されることも極めて稀であったし、例え売りに出ても私が購入できるような金額のものではなかった。振り返れば、実際にあれこれお教をを請う機会も少なくなかったのだが、一体どういった資料で調べがつくのか、殆どは即座に答えを提供されて驚嘆する思いであった。

◎塚田嘉信氏自身による目録化

塚田氏は、例えば映画雑誌の創刊号目録や稀少映画雑誌の総目次といった私家版を作成しているが、それらも自身の所蔵する資料、文献をリスト化するという目的で編纂している訳ではない。飽く迄も映画史の基礎研究資料を公にすることが目的であった。そもそも、塚田氏以前の時代は日本映画史を研究する上で、基礎資料、基本文献とは何か、さえ十分に、否、殆ど議論も追及もされずに来た。『キネマ旬報』を揃える、くらはいは映画史研究者であれば、先ずは誰もが考える。だがしかし、塚田氏の時代、この日本を代表する映画雑誌を揃えて架蔵している図書館、研究機関など一つとして無く

（現在に至るも、オリジナルで全てを揃えるところがあるかどうか）、些かの誇張を含めて記せば、公共機関は過去の映画雑誌などは誌名を問わず収書の対象外であった、と言っていいだろう。

塚田氏も、当然の如く、この『キネマ旬報』の蒐集という難関に殆ど真っ先に取り組んでいるが、『キネマ旬報』が揃い始めると、この雑誌だけでは資料として不足する時代が見えてくる。こうして新たな映画雑誌の探索が始まる。蛇足を加えることを承知で記せば、塚田氏の時代は古雑誌1冊を探すにも、古書店の棚を幾度も眺め回し、或いは古書即売展へ出向いて古雑誌の山を手にとって見つけ出す、という作業の繰り返ししか、それらの資料、文献に辿り着ける方法はない。インターネットも無ければあらゆる検索端末なども無い時代である。加えて、氏の時代（それは私の蒐集を始めた時代も同様であったが）は古書店側も映画資料、映画文献は買い手も無いものとして積極的には扱うことが無かった。否、寧ろツブシと称して、古書業界では「ゴミ」の類くらいにしか扱われなかった。昨今のように、分厚い即売展目録の巻頭に映画資料がカラー写真で載っていることなど、絶対にあり得ないことであった。即売展で会計の為にカウンターに映画の資料、本を差し出すのは「恥ずかしかったですよ」と、或いは、「我々の買うものはゴミですよ」と、私も氏から聞かされている。

映画資料、映画文献の蒐集家や研究者がこのような困難な作業を強いられたのは、何も塚田氏お一人だけでない。氏と同時代、或いはそれ以前の者は、皆が等しくこのような中でコレクションを充実させ、研究を深めていったのである。例えば、我が国の最初の映画書誌である『日本映画書誌』（昭和12年12月、映画評論社刊）を著した山口竹美氏にしても、同様の計り知れない探索からこの一冊の成果へと辿り着いている。流石に著者ご自身も「跋の二」と題したあとがきの中で、「こんな下積仕事は他人に判らない苦労が多い」と嘆いているくらいなのだが、氏がこの著作の「補遺」の中に『實地地應用近世新奇術』という、凡そ映画文献とは気付かぬ一冊を掘り出して報告したことから、日本映画最初の映画文献が、実は非常に複雑な問題を抱えた出版物であるという事情、背景を示唆したことが、後進の研究者に対してどれだけ映画文献史研究を魅力的にしたことか。付け加えれば、凡そどのような分野であっても、この時代までは、即ちネット社会以前は、古書を探す研究者、或は趣味で蒐集する者であっても、古書店や即売展の棚を端から端までか見渡すか、或は積み上がった古書の山を丹念に見回す、否、引っ掻き回すくらいしないと、充実した蔵書は築けなかったのである。結果として、自身の関心ある分野以外の書物までも覚えることになり、そうした人々が「古書通」と呼ばれたのである。古書通は、押し並べて「知識人」であった。

話を元に戻そう。従って、塚田氏の蔵書は、こうした映画資料、文献を、天下一品の如くこれ見よがしにひけらかす今日とは、正に隔世の感のある、そうした環境の中で築いた資料群なのである。だがしかし一方で、そうした困難な探索方法、手段は、新たな資料の「発見」を体験する喜びがあった。今日であれば、事前に発行される即売展目録に、わざわざ目立つようにゴシックで戦前の映画雑誌が表記されることも珍しくはないが、その当時は、目録にも載らずに珍品、珍籍が、当日即売展会場へと出向いてみれば、目の前の棚に当たり前のように並んでいたり、かと思えば前述したような隅の方に雑然と積まれた古書の山に埋もれていたりしたのである。その「発見」の喜びが、また次への発見に繋がる期待を抱かせ、陽の当たらぬ研究の支えにもなっていたのである。

つまり、氏の同時代、同世代であってもそれらを蒐集することは容易な作業では無かった筈だが、時間が過ぎれば過ぎるほど、その基礎資料さえも失われかねないという危機意識が、一層、氏を蒐集へと駆り立てたのであろう。面と向かっては、蒐めるのが楽しい、私家版を作っている時が楽しい、とだけしか語らず、他人（ひと）の何倍も探索の努力をしていること、集中し、少なくない資金を投入すること、1冊1冊を丁寧に読み込み、更に必要な資料、文献が漏れていないか、を数十年の間、数瞬の間も途切れることなく続けていることは、恰も歴史研究者なら誰もが当然取り組むべき義務、

といった姿勢、態度であった。そして、「雑誌は欠号があると使えませんよ」とも、また何度も聞かされた言葉であった。このことも、恐らくは自身が雑誌を完全に揃えてみて初めて「使える」ことに気付かれたのであろう。揃えなければ歴史を記録し得ないことを発見したのも塚田氏であった。

塚田氏自身による「目録化」、つまり氏の作成した書誌、著作の全容は別掲の佐崎順昭氏による「書誌」を参照頂きたいが、これらの私家版書誌で、補記しておくべき点がある。

私が塚田嘉信氏と初めてお会いしたのは、1980（昭和55）年7月20日のことである（注・2）。この「出会い」のことを詳しく記すのも今後の別の機会に譲るが、わが国の最初期の映画文献に就いての問合せの手紙を差し上げたところ、「いちどお目にかかりたいと思いますので、お遊びにいらっしやいませんか」という返信の葉書を頂き、この日にご自宅を訪問したのである。最初の訪問の際に、いきなりそれまで発行した分の『映画史料発掘』一揃いを、「これは差し上げます」といって提供下さった喜びは昨日のこのように記憶するが、その言葉に続いての、「何事も十年です」という言葉は、それ以上に重く響いて心に残った。当時、古書店で働いていた私は、アパート住まいで電話も無く、氏との連絡もそれ以後は全て手紙での遣り取りであった。

そしてその年の秋に、氏の『日本映画史の研究』が出版された訳だが、今、正確な時期を記せないが、その頃から、私も自身の原稿を何らかのかたちで纏めようと、タイプライターの購入を考えていた。タイプライターと言っても和文のものである。まだワープロ（それでさえ最早過去の遺物だが）が非常に高価な時代であった為に、その頃、神田の古書会館（今の場所と同じだが、建物は建て替えられている）近くの駿河台下交差点沿いに電動の和文タイプライターの販売店があり、仕事で古書会館へ通う度にその前を通るので、やがてのことに購入を決めた。その後しばらくしてからだったか、氏にお会いした際、「和文タイプライターは便利ですか？」ということを知られた。そしてさほど日も経ずにいる頃に、「私も手に入れました」との連絡を受け、些か驚かされたのだった。

前置きが長くなった。塚田氏は、前述した通り、『日本映画史の研究』刊行後も『映画史料発掘』の発行を続けられていたが、1983（昭和55）年1月発行の、『映画史料発掘』特別号、『香港および上海における初期映画上映の記録』の作成に際し、この和文タイプを初めて使用された。「使用」とは、用紙にタイプライターで原稿を打ち（氏のタイプライターは電動ではなく手動）、それを版下にしてコピーを取り、製本までも手作りをする為の道具、ということである。従って、それまでの活版印刷のものとは違い、恐らくは部数もせいぜい多くて10部程度かと思われる。これ以後、氏の作る私家版はこうした手作りによるものばかりとなり、当然ながら部数も同様であったと思われる。このタイプ印刷というのは、嘗ては専門の業者があったくらいだが、塚田氏の場合は橋弘一郎氏の「レイアウト教室」に学んだ経験が生かされていることは言うまでもない。詳述する紙幅のゆとりが無いが、原稿の文字数もレイアウトに合わせて書き、更には一度打った活字は簡単には訂正も出来ない。割付のセンスは、活版の『映画史料発掘』でも存分に発揮されているのが判るが、氏の私家版による「目録」や「総目次」には、こうした努力が払われていることを、それを知る者も既に私一人であると思われ、敢えてここに記しておく。

◎塚田嘉信氏資料を特徴付ける始まり

国立映画アーカイブが塚田嘉信氏旧蔵資料を受け入れることになった経緯は、直接交渉に当たった岡田秀則氏の報告に譲るが、ここでは若干の個人的回想を交えて、資料の特徴を記す。但し、塚田氏の旧蔵資料全体に就いては、その整理が現在進行形であり、一般的な映画文献や映画以外の書物(それらもまた膨大な冊数になるが)を除いて、凡そ全てに目を通したものの、1点1点の詳しい調査・確認を終えていないので、概要の報告となることをお断りしておく。

塚田氏ご自身は、映画を好きになった時期を中学時代の「昭和17年」、その理由を「病気をして暇だったから」と語っている(注・3)のだが、そうであったとしても戦時下のことであるのだから、ご自身の体調もそうだが、社会的環境も決して恵まれた時代ではない。また、「暇だった」としか語っていないので、それ以上に何らかの切っ掛けとなるようなことがあったのか、例えば誰かの影響を受けてのことなのか、その辺りのことは判らない。私自身もまた、そうしたプライベートなことには関心も無かったことから、所謂生い立ちや過去のことを積極的にお聞きしたことも無かった。

しかし、その「暇」の結果は決して中途半端なものではない。塚田氏資料に残る『昭和20年以後見た映画』と題したノートは、題名の通り、映画鑑賞記録のノートなのだが、疎開先の福島で戦中の昭

昭和20年以後見た映画

1945	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35			
1月	17	17	17	20	20	13	13	17	17	8	10	24	14	3	14	3	5	4	19																			
2月	3	9	8	12	12	8	8	10	14	13	10	5	3	18	9	6	4	13	6	19																		
3月	6	12	13	18	11	4	15	14	12	9	16	8	13	9	12	6	27	11	15	19																		
4月	3	14	12	12	13	13	14	13	11	9	22	14	16	9	15	8	20	11	19																			
5月	1	11	9	9	9	9	14	12	0	14	11	14	6	12	6	17	10	15	15																			
6月	5	11	11	6	14	14	15	14	0	14	9	16	8	13	9	16	10																					
7月	8	10	10	16	16	11	11	0	0	13	8	4	2	11	5	24	15	10																				
8月	4	11	11	25	10	10	0	5	4	23	14	0	14	2	19																							
9月	5	14	13	5	13	13	0	0	3	2	0	0	9	14	8	2	11																					
10月	3	11	11	6	15	17	6	4	3	2	2	2	2	2	1	10	15																					
11月	5	14	14	21	21	8	8	9	5	6	3	3	3	1	15	9	14																					
12月	7	15	15	5	6	16	9	10	6	5	3	8	6	13	7	25	15																					
本数	57	135	155	133	116	81	114	107	55	26																												
回数	57	135	155	133	116	81	114	107	55	26																												
1月	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77																						
2月																																						
3月																																						
4月																																						
5月																																						
6月																																						
7月																																						
8月																																						
9月																																						
10月																																						
11月																																						
12月																																						
本数																																						

「昭和20年以後見た映画」ノート 冒頭頁

和20(1945)年1月1日から、そして敗戦後にかけてと見続けた邦画洋画の作品を列挙し、記録を終える昭和31(1956)年5月までの10年間余りの期間、作品数は実に1623本という数になる。映画雑誌を最初に購入したのは、昭和19(1944)年の『新映画』4月号だと言うから、実際には福島への疎開以前から鑑賞が始まっていたと思われるが、この雑誌の購読と鑑賞の記録、という作業が、やがては、と言うよりは比較的早い時期に、必然的に基礎資料への関心へと発展したであろうことは容易に想

像し得ることである。更には、映画ジャーナリズムへの関心もまた、同時進行的に抱いたとしても何等不思議は無いであろう。

即ち、鑑賞記録の充実は、公開記録としても性格を持ち、それは引いては公開日の記録の必要へと発展し、映画ジャーナリズムへの関心は、雑誌紙面での記録の正確さへの追求へと繋がり、既にこの時期には氏のライフワークへの取り組みの萌芽が見られると言っても過言ではないものを感じ取れるのである。

公開日とは、即ち「初」公開日である。その作品が初めてお目見えした日付、である。鑑賞ノートに記録した自身の鑑賞日の記録が、こうして初公開日の記録の必要性（注・4）へと結びつき、この「初」が、以後、様々な映画史上の「初」の記録を求め、記録に残らぬものは塚田氏自身が探索しなければ、という義務感を生んだ。それは、映画史研究が「半可通」でまかり通った次元から、「全可通」でなければならない、という結果としての必然であった。このようなことを、決して塚田氏からお聞きした訳ではないし、またお聞きしようとしたことも無かったが、塚田氏の遺された資料群を眺めていると、そのような考えは自然と浮かんで来る。

塚田嘉信氏は、映画愛好家となった最初から、映画史研究者として為すべき仕事を見出していた。否、あるべき自身のゴールを見据えていた。こう判断して間違いないであろう。

◎映画資料研究会

塚田氏が発行人（或いはその一人）として最初に関わる私家版雑誌は『映画資料』である。第1号の発行日は1957（昭和32）年10月28日で、表紙に刷り込まれた発行所は塚田氏の御自宅である湯島の住所で、続けて「塚田方 映画資料研究会事務局」となっていることから、塚田氏が会の代表（特に「代表」とする肩書は無い）であろう。同様に記載された塚田氏以外の同人は、井沢光吉、一置夏洋、神田浩靖、細谷勝雄、吉田智恵男、であり、恐らくは『キネマ旬報』の旬報サロン投稿仲間と推測する。

一体誰の呼び掛けで会として集まることとなったかは今のところ資料も見当たらないのだが、発足に際しては細かく「同人規約」を定め、雑誌名の商標登録まで行う慎重さである。残された資料には、恐らく『映画資料』第1号の発行に際して添えられたのであろう、孔版の挨拶状と共に、「映画資料研究会の仕事について」というタイプ印刷による会の紹介状がある。長いものだが、以下にその全文を引用（原文は縦書き）する。

「映画資料研究会の仕事について

一、映画に関するすべての資料、即ち、文献・雑誌・プログラム・プレス・スチール・チラシ・新聞映画記事切抜き等、一切を蒐集し、整理し、分類する。

一、日本映画の発達過程を徹底的に調査し、研究する。

右の目的を達成するため、特に研究会内に

「映画資料調査研究十年計画実行運営委員会」

を設置、次の諸事項の集大成をはかる。

(1)「日本映画全史」の編纂

かつて、故水町青磁氏を中心に調査、一部発表された「日本映画史素稿」と同じ方法をとる克明にして精確無比、他に追従を許さない完璧なる日本映画発達史。

既に上野図書館所蔵の各新聞について調査を開始しました。

(2)「明治・大正・昭和三代日本映画全作品総目録」 同じく

「本邦上映全外国映画作品総目録」 の作成。

(3)「三代日本映画人大鑑」の作成。

(4)「生きている映画史・映画人聲のライブラリー」テープレコーダーによる製作・保存。

(5)映画資料の全国的分布リストの作成。

一、世界各国の映画研究者と連絡、親睦をはかり、それぞれの資料を交換する。

一、かくれたる映画研究者及び映画資料保存者を発見し、紹介する。

一、研究会が発行する出版・刊行物

(1)機関誌「映画資料」 年四回（総アート紙・B5版・十六頁）

(2)「日本映画史研究」 年二回（A5版・百頁前後）

(3)「内外映画総目録」 年一回（総アート紙・B5版。三十六頁）

右の一九五七年版は明年一月十日全国書店にて一齋発売の予定。定価四拾円。

ほかに、会員相互の連絡、親睦をはかる目的から随時「映画資料事務局ニュース」を製作、会員間に頒布する。

なお、一九五九年版より刊行すべく、目下企画検討中のものに「全国映画館便覧」「ポケット日記・映画鑑賞手帖」「世界映画大鑑」等がある。

一、月例研究会

毎月一回定期的に研究会を開き、会員は各自研究の成果を発表する。

一、会員規約

右は別にありますから、入会御希望の方は事務局までお申出下さい。

昭和三十二年十一月

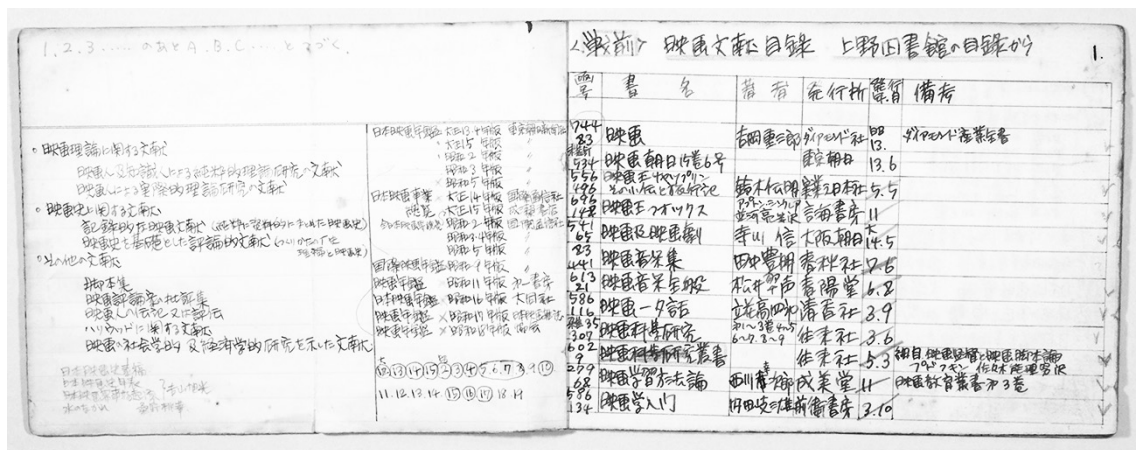
映画資料研究会事務局

以上の通りで、個々の項目も恐らくは同人間で検討、議論されて決定していったのであろう。ここでそれらの一つ一つの項目を検証することはしないが、何よりも注目すべきは、この時点で既に「一部発表された「日本映画史素稿」と同じ方法をとる克明にして精確無比、他に追従を許さない完璧なる日本映画発達史」という1行のあることである。同人間の約束事とは言え、塚田氏も26歳になるかならないかという年齢の時に、戦前の『キネマ旬報』に連載された「日本映画史素稿」を手本とする方法による日本映画史の完成が視野にあったのである。今日では、初期映画史を研究する者にとっては必読となった「日本映画史素稿」だが、そしてその「必読」を意識させたのが塚田氏の『日本映画史の研究』であることは誰もが認めるところであるが、『日本映画史の研究』を遡ること遥かに23年も前に、やがては辿り着けるであろうその成果の発表する日へ向けて、作業をスタートさせていたのである。見据えていた映画史研究のゴールの、その完成図は、「日本映画史素稿」を発展させたものということ、この時点で既に明らかにしていたのである。

◎映画文献、映画雑誌蒐集への道

映画史研究者として「全可通」であろうとする作業は、こうして20代の半ばには明確な、具体的な目的を持って始められる。

そして、その「全可通」である為の一つの課題として、ではどういった映画文献を揃えるべきなのか。専門図書館の無い時代であるから、塚田氏が先ず初めにしたことは国会図書館の蔵書の調査である。資料の中に『〈戦前〉映画文献目録 上野図書館の目録から』と題したノートがある。万年筆によ



「〈戦前〉映画文献目録 上野図書館の目録から」ノート 冒頭頁

る手書きノートだが、題名の通り、当時の国会図書館である上野図書館の目録から、映画文献を選んで書き写したものである。題名にわざわざ「戦前」とあることから、この筆写も敗戦後の比較的早い時期と想像されるが、残念ながら正確な作成時期は不明である。普段から取書目的で持ち歩くであろうか、全体で28頁の、12.5×18センチというハンディなサイズの横開き手作りノートである。リストの項目の最初が、「函 号」とあることから、上野図書館での調査も、カード・ケースからの転記であることが判る。記載書目の殆ど全ての項目（即ち「殆ど全ての文献」ということだが）にチェックが入っているのだが、このチェックが入手済みを意味するのか、或は上野図書館での現物調査済みを意味するのか、はまだ判らない。が、いずれにしても、塚田氏には、つまり国会図書館にあるそれまで発行された映画文献は、この作業によって大半が記憶されたのではないだろうか。

更には、映画資料研究会のスタートと前後して、戦前の公刊された優れた映画書目である山口竹美氏の『日本映画書誌』を、昭和32(1957)年10月に京都の西村書店から購入している。だがしかし、明治期以来、発行された映画文献は決して少ない数ではないし、映画雑誌に至っては、関東大震災後には爆発的とも言える創刊ラッシュが起こっているのだが、それらを記録に留めるといった意識を持った研究者も、流石に見当たらない。『日本映画書誌』もこの時点からは、既に20年も前の刊行であるし、また山口竹美氏が蒐集した文献類も、その時点でも謂わば古書とされるものに重点を置かれていて、新刊の記録は残念ながら手薄である。即ち、『日本映画書誌』に収録された「創刊號雑誌目録」も、明治45(1912)年から昭和11(1936)年にかけての217種が記録されているとは言え、それは飽く迄「附録」扱いであって、塚田氏にとって映画史を正しく記録する作業としては納得し難いものと映ったのであろう。昭和11(1936)年以降の、しかも戦時下、そして敗戦後という大きな社会的影響を受けた時代の記録もまだ無い。こうして、映画雑誌の登場以来の可能な限りの創刊号蒐集は必然となり、より完全な「映画雑誌創刊号目録」の完成は更に自身にとっての義務であると、自らに使命を課すことになる。

同時に、最大の懸案でもあった『キネマ旬報』を本格的に揃えるという作業が、映画資料研究会の解散後に始まっている。

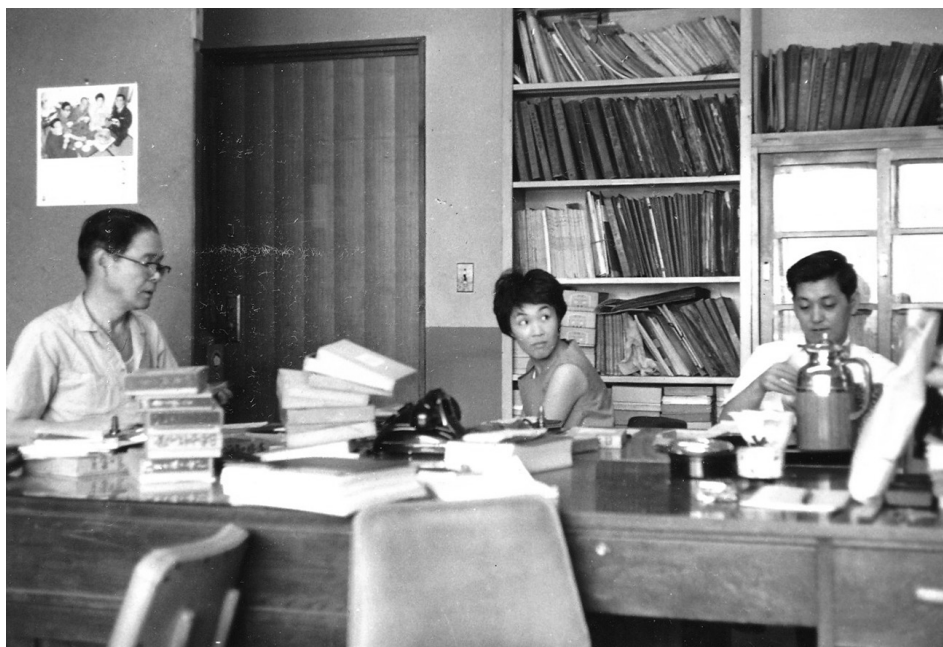
◎塚田嘉信氏資料のそれぞれ

塚田氏資料の特色は、こうして映画史に於ける「正しい記録を求める」、「正しい記録を残す」、「様々な第1号を記録する」、「様々な第1号を蒐集する」、ことに焦点が絞られる。勿論、映画というものが庶民にとっての娯楽であってみれば、それらの作業の中にも僅かではあっても「楽しさ」を求め、氏自身が映画ファンであってみれば、ときに「趣味」の要素が加わるのは言うまでも無いことである。

そのことを顧慮しつつ、実際に残された塚田氏の資料、文献コレクションの特色を、以下に紹介する。

◇『松竹七十年史』関係資料

前述した通り、塚田氏は戦中から映画鑑賞、映画雑誌の購入を始め、更に中学時代の疎開先での一層の集中的な映画鑑賞と、それを記録することが、映画との関わりのスタートである。敗戦後に帰京して以降の、大学進学は、健康上の理由で中退を余儀なくされたものと思われるが、一方で、『キネマ旬報』の「旬報サロン」への投稿から、同誌の編集者のお一人だった田中純一郎氏に見出され、投稿仲間であった吉田智恵男氏と共に同社への編集部への登用へと繋がることになる。こうして田中純一郎氏の誘いで『キネマ旬報』の編集部に参加したが、ここでも健康上の負担からだったと推測するが、1年程で退いている。だが、田中氏との仕事は続き、『日本映畫發達史』（全三巻）の索引の作成協力を経て、昭和37（1962）年から『松竹七十年史』編纂協力の為、松竹社史編纂室勤務が始まる。具体的に



松竹社史編纂室に於ける塚田嘉信氏（右）と田中純一郎氏（左）。
昭和38（1963）年8月29日（木）

は、演劇演芸の興行記録、映画作品記録、洋画輸入記録等、同社史の優に半分の量を占める詳細な記録調査を担う。実際に残る資料は、それらの調査のノート類、細かなメモ類、そして関西方面の調査

を担当した水野一二三氏、鎌谷慶次氏の書簡類が中心である。従って、入稿用に作製されたであろう清書原稿は含まれない。また、国会図書館での新聞調査によるノートの記録は、田中純一郎氏が日大の講師をされていた関係からであろう、同大学の学生アルバイトを雇い、必ずしも塚田氏自身による記録ではない。こうした調査資料、調査原本が松竹の保存対象とならなかった理由は判らないが、社史編纂室も『七十年史』完成後は解散されるのは自明のことであるから、編纂室に残せば却って廃棄されるものと考えて、塚田氏ご自身の控としても手許に残すことを選んだのであろう。但し、映画のみに限らず、演劇、芸能の記録を含むものであり、また調査も必ずしも時系列に沿ってなされたものではないので、今後の整理、活用には課題も多いものと思われる。

尚、同書の造本には、映画世界社の橋弘一郎氏が起用されており、水野、鎌谷、橋の各氏とのその後の深い交流も、この時の仕事を切っ掛けとしたものと思われる。私は、塚田氏にお会いするまでは、鎌谷慶次氏は全く知らない名前だったが、ある日、塚田氏が『松竹七十年史』のときに関西の興行記録を手伝ってくれた鎌谷慶次という人は、関西演劇のことなら何でも記憶していてすごい人でした」と、はっきりと敬意を込めて話されたことを、今でも記憶している（注・5）。鎌谷氏と共に、水野氏の塚田氏宛て書簡も、実は田中純一郎氏批判、否、非難の書簡が少なくないことを付記しておく。このことが、後の塚田氏と田中純一郎氏との決裂にも繋がることと思われるが、そのことの実状の判断もまた、後日の課題であろう。『松竹七十年史』編纂終了後、鎌谷氏からは、以下のような和紙の巻紙にしたためられた毛筆の書簡が届く。少々長くなるが、鎌谷氏の協力に対する塚田氏の敬意と同時に、塚田氏の人柄をも伝える内容でもあるので、全文を紹介（原文は縦書き）する。

「謹啓

お手紙拝見いたしました 先月末にもう一度松竹本社に電話して最後のお別れの言葉なりを交さうと思ひ乍ら各座の初日を控えつい失禮して了ひました

孰れにしましても今度の社史編纂は水野一二三氏の言葉を俟つまでもなく貴方が居られた故完成したものと私は思つてます

演劇や映画の史的探究に対する異常な御熱意と あの不出来な田中氏をよくカバアされた当節には得がたいその御人柄には敬意を拂はずには居られませぬ

事実貴方が居られた故私もついて行けたので、さうでなけりや途中で投げ出したらうと思ひます 今度の仕事の大きな収穫は社史そのものでなくて貴方とお知り合ひになつた事です、あんな不愉快な田中氏とは二度と口は利き度くありませんが貴方とはこれを機会に長く長く御厚誼を得たいと存じます

今後何かこの種のよい仕事があれば是非二人でやつてみたいものです、また御同封の品貴方から頂戴すると思ひも寄りませんでした いろいろお心遣ひの程深謝の至りです

御厚情だけをお受けして失禮とは存じ乍ら御返し申し上げやうと思ひましたが小生不日東上の砌箱根か伊東あたりで二人で社史を展き乍らその惚気やらまだ生々しいいろいろな思い出話で楽しい一夕を過ごすための資金の一端にしたいと思ひますので兎に角この俣お預りさせて戴きます 小生とは違ひ春秋に富んで居られる貴方ですから今後の御活躍を切に祈つています それよりも成るべく早く上京して拝眉したいと思つています

昭和三十九年六月四日 松竹関西支社にて

鎌谷慶次

塚田嘉信様」

以上の通りで、塚田氏の始終一貫した誠実な対応ぶりを語っているが、文中にある「箱根か伊東あたりで」の件は、翌昭和40(1965)年3月に箱根行きで実現させている。これも「箱根廻遊記念」として、鎌谷氏と塚田氏の他は或いは松竹関西支社の仲間であろうか、30人程の人物と一緒に写る記念写真が残り、その裏面には鎌谷氏の部分を指して「松竹社史編纂上の蔭の功績者 鎌谷慶次氏」との塚田氏



伊豆箱根鉄道 HAKONE スカイラインコース 回遊記念

箱根回遊記念写真。最前列の黒いコート姿が鎌谷慶次氏。最後列の右端が塚田嘉信氏。
昭和40(1965)年3月15日(月)

による書入れがある。今日、遡って松竹の興行記録を調べようとする研究者の中に、どれだけの人がこの鎌谷氏の名に注意を払うであろうか。『松竹七十年史』の田中純一郎氏による「あとがき」には、確かに「資料の収集調査は塚田嘉信君を主として、松竹関西支社演劇製作室鎌谷慶次氏その他、有志の協力を得た。」とはあるものの、塚田氏ご自身が「蔭の」と書かれるくらいであるから、既に「全く埋れてしまった」功績者であるかも知れない。敢えて書簡全文を記録した次第である。

尚、『松竹七十年史』は、映画会社の社史としても最も完成度の高い一冊であるが、関係者に配布されたものとは別に、限定5部、という特装本がある。これも個人的なことを記せば、古書店員時代、その世界の情報を得る目的で『日本古書通信』という月刊雑誌を購読していたが、店主からの「バックナンバーも読んでおきなさい」という助言を受けて、やがてのことに敗戦後、再刊された分に就いてはほぼ全号を揃えていたと記憶する。その頃から、雑誌はある程度揃うと一応は全冊に眼を通すよう心掛けていたのだが、そしてこの雑誌に限っては自分なりの索引を作ったりしていたのだが、昭和39(1964)年12月号(第29巻第12号)収録の、「1964年の限定本」という今村秀太郎氏の記事に、次のようなものが記録されていることに気付いた。

「松竹七十年史 田中純一郎編 非売配り本 各冊番号入函 総革天金特製本五部あり」

今村氏がどうして「特製本五部」のことを知り得たのかは不明だが、そのことを記憶していた私は、あるとき、『松竹七十年史』の5部本というのは、どこにあるんですかと塚田氏にお聞きした。氏は

少し驚いたようなお顔をされて、「よく知ってますね、僕のところにありますよ」と答えられた。そのお答えに私の方が、よりびっくりしたことは言うまでもないが、これも勿論、「見せて下さい」とは続けることが出来なかった。また、その気も無かった。今から思えば、あの『映画雑誌創刊号目録 続・補遺篇』が5部というのは、実はこの『松竹七十年史』の特装本の部数が伏線としてあったのだろうか。その「総革天金特製本」も、当然のことだが受け入れた塚田氏の資料にある（注・6）。

◇橋弘一郎氏旧蔵資料

本来ならば、塚田氏のコレクションを紹介するには、先ずは氏自らが蒐集、或いは構築した資料類を取り上げることが優先されるべきであろう。それを敢えて、こうした先輩に当る映画人、或いは映画史研究者から譲られた（と考えられる）資料を紹介するのは、当然乍ら理由がある。ひとつは、塚田氏が映画業界の先輩、映画史研究仲間、そういった人たちに対して敬意を払って接し、また非常にそれを大切に人だったからである。映画史研究は、確かに他の分野と比較すれば歴史も浅く、その分、残されている資料もまた、他の分野、例えば美術史、演劇史等と比べれば多いとは言えないかも知れない。だがしかし、実際の歴史研究に携わってみれば、研究仲間による資料探索への協力や助言、更には先輩の指導無しには、優れた成果に辿り着くのは困難であるし、そもそもが独善主義に陥り易いのは言うまでもないことである。『日本映画史の研究』の「あとがき」に於ても、そうした研究仲間のことを具体的な協力内容まで記して、一人として疎かな扱いをしていない。同じ分野の研究者たちの中で、如何に一步でも先に進んだ研究成果を発表し、如何に周囲よりも大きな評価を求める研究者たちとは、凡そ大きくかけ離れた意識でもって仲間を大切に迎え入れたか。自身も仲間であり続けようという態度であったか。それが極めて塚田氏の研究を特色付けていたから、である。このことは当然のこと乍ら、私自身、氏に接して教えられたことの中でも、最も大きなウェイトを占めている。

従って、ここで取り上げる何人かの、所謂「旧蔵資料」は、それぞれが映画の世界で大きな足跡を残した人物でもあり、そうした人々との間に築いた信頼関係から塚田氏に譲られた、或いは贈られた資料類であると断言出来るものである。そしてまた、それぞれが映画史上の第一級資料だからでもある。

前述した通り、映画世界社社主の橋弘一郎氏との交流は、今のところ『松竹七十年史』編纂が切っ掛けだったと推測する。今のところ、とするのは塚田氏資料に含まれる橋氏関係資料の整理、調査がまだ充分ではないため、という事情もある。また、塚田氏は『日本映画史の研究』の奥付頁に記載したご自身の略歴に、「故橋弘一郎氏のレイアウト教室等で調査編集に従事。」と紹介してはいるが、それ以上に橋氏との交流、或いは思い出等を書いたものが無く、更には私自身も塚田氏からは橋氏に就いては何も聞いた記憶が無く、せいぜい『映画の友』は全部揃ってます」ということをお聞きした程度であった。『日本映画史の研究』でご自身が書かれたプロフィールに、その当時もう少し注意を払っていれば、せめてレイアウト教室とはどういったものだったのか、そこでの調査編集はどういった仕事なのか、くらいはお聞きしても失礼ではなかったろうし、誰か一人くらいはこの件に興味、関心を持つであろう、と期待をされていたのかも知れない。

従って、私も今回の塚田氏資料受け入れまでは、橋氏旧蔵資料があるとは思ってもいなかった。橋氏は、『映画の友』発行中の昭和42（1967）年6月29日に亡くなる（注・7）のだが、即ち、橋氏の旧蔵資料が、何故、塚田氏のものとなったか、といういきさつに就いても、現状では一切不明である。また、橋氏の元にあった資料全体からは、どのような割合になるのか。また、それが選択されたものであるならば、誰がそれを行ったか、といったことも判らない。

いずれ資料の詳細は明らかにされるであろうが、ここではその内容を大まかに紹介するに留める。橋氏個人宛て、或いは映画世界社橋氏宛ての書簡、及び取り交わした名刺が、それぞれ大量に残され

ているが、これらは当然乍ら多くの映画人が含まれる。橘氏は震災前後から映画ジャーナリズムの世界で仕事を始められてもいるから、サイレント時代の資料も少なくないが、中でも海外の映画会社、或いはスターから取り寄せたスチール、ポートレート類、無声映画時代の大量のプロマイド類も、恐らく橘氏旧蔵ものと思われる。

橘氏は長く映画ジャーナリズムの世界で活躍されたにも関わらず、という言い方で良いのか、恐らくそれだけ映画雑誌の編集、発行にエネルギーを注ぎ込んだからであろう、自身の映画に関する著書は1冊も無い。せいぜい氏が社主を務める映画世界社が創立30周年を迎えた際に『映画世界社三〇周年記念 パンフレット』と題した非売品の小冊子がそれに該当するであろうか。即ち、私たちが映画雑誌以外の書物から知る橘弘一郎氏の姿、業績は、書籍のレイアウトの専門家（注・8）であり、そして何より谷崎潤一郎の著書の蒐集家、即ち瀟洒、且つ豪華な造りの全4巻ならなる『谷崎潤一郎先生著書総目録』（昭和39年7月～同41年10月10日、ギャラリー吾八刊）の編著者として、である。そして、今回の橘氏旧蔵資料には、この谷崎氏関係の資料もかなりの量が含まれる。橘氏が蒐集した谷崎の著書と資料は、橘氏の歿後の昭和42（1967）年8月1日に、日本近代文学館に寄託（注・9）され、更に橘氏の御夫人スエ氏歿後に寄託から寄贈へと、橘氏実弟早田雄二氏によって切り替えの手続きがなされた。従って、これらの経緯を見るだけでは塚田氏の元に残る谷崎関係の資料も、日本近代文学館へと収められるべき資料だとも思える。が、現実として一部は塚田氏へと託された訳である。

橘氏旧蔵資料には、2冊の日記帳が含まれる。日記帳、と言うよりは大きなサイズの手帳、とでもする方が正しいかも知れない。1965（昭和40）年と1966（昭和41）年の、いずれも竹尾洋紙店のものである。この橘氏の謂わば手控えの記録の中に、「塚田君来宅」という記録が残る。しかも、この2年間だけで実に177回の訪問回数である。或いは、記録に漏れた回もあるかも知れず、前後の年度も不明であり、いずれにしてもこの時期極めて集中的に橘氏の許を訪ねているのである。残念なのは、訪問記録のみであり、賃金らしきもの支払ってみたいなので、前述したレイアウト教室の「生徒」として通っていた訳ではなさそうである。ということならば、「校正依頼」といった文言が添えられている場合もあることから、この時期であれば『谷崎潤一郎先生著書総目録』編纂の手伝いであることは間違いのないであろう。しかも『総目録』の第4巻（別巻）は「演劇 映畫篇」であり、大正活映に



京都、法然院の谷崎潤一郎墓前に於ける塚田嘉信氏（左）と橘弘一郎氏（右）。撮影：大崎史郎氏。
昭和41（1966）年10月11日（火）

始まり、また繰り返し映画化もされる谷崎の映画との深い関わりを詳しく記録するものである。こうした経緯があったことから、或いは橘氏の生前に、二人の間で何らかの譲渡に関する約束がされていたか、或いは橘氏歿後に御夫人の計らいで「必要なものがあれば」といった形で託された、とも考えられるであろう。旧蔵資料にはこの別巻に使用された原資料も多数含まれており、映画史に限らず、谷崎文学の研究者にとっても極めて貴重な資料群であろう。

いずれにしても、塚田氏が橘氏から受けた影響、或いは学んだものが少なくなかったことは間違いない。塚田氏はずっと後、1983年になって原本からの目次のコピーによる『雑誌『活動之世界』総目次』という私家版を作成しているが、実は、今回の塚田氏資料にはそれ以前に活版印刷による『活動之世界』の総目次の作成を準備していた原稿一式が残されている。それには口絵のレイアウト指示の原稿も含まれることから、活版での作成を考えていたものと推測する。何故、それが完成に至らなかったまでは不明であり、また私もこのことは何もお聞きしたことが無かったが、この原稿類の中に、「序文」として収録を考えていたであろうと推測されるメモがある。原稿用紙に清書したのではなく、それ以前の「下書き」であり、実際に作製されたとしても、更に推敲されたであろうと思われるが、以下にそのメモのままの文章を紹介（原文は縦書き）する。

「本書を故橘弘一郎氏に捧ぐ

私がおわが国映画ジャーナリズムの草分けの一人である橘弘一郎氏の知己を得たのは氏が逝去される三年ほど前である。

氏は大正十一年に「蒲田」を創刊されて以来「映画の友」など十数種の映画雑誌を刊行されたが、私が先年「映画雑誌創刊号目録」を献呈した際、氏がいちばんなつかしか（ママ）り、ほめたたえたのは井出鉄処氏発行になる「活動之世界」で、是非この雑誌だけは揃えてみようということになった。そして、私の手許に四十冊の「活動之世界」が集まったのは氏がなくなられて十カ月の後のことであった。

もし氏が存命ならば、もちろん喜んでくれたであろうし、この小冊子を作るにしても趣味豊かな故人の助言なり協力がいただけて、もっとすばらしい別なかたちのものになったにちがいない。現在の私にはこれが精一杯のところ。氏にもう少し生きてもらいたかったとかえすがえすも、残念でならない。」

以上の通りで、そもそも『活動之世界』の蒐集の切っ掛け自体が橘氏からの助言によるものだった訳だが、前述したコピー版の『雑誌『活動之世界』総目次』にはこういった「序文」や「後記」そのものが収録されていず、従って橘氏の影響だったことも知り得ない。

◇田中栄三旧蔵資料

橘氏同様に、田中栄三氏に就いての説明もここでは必要ないであろう。だが、私には、これも橘氏の場合のように、塚田氏の口から田中栄三氏のことは、余りお聞きした記憶が無い。否、話題になったことがあったとしても、田中栄三氏と言えば、それこそ橘氏以上に遥に遠い存在だと思っていたであろうから、当時の私には関心も薄く、既に記憶の彼方であるのかも知れない。ただ覚えているのは、どういった話題からその名を聞いたかは記憶の外だが、栄三氏の娘である田中松子氏、竹子氏の名に就いてだけは何度かお聞きしたように思う。

従って、田中栄三氏との、恐らくは深い交流があったであろうことは、今回の資料受け入れで初めて知ったような次第である。但し、この資料類も塚田氏ご自身が、例えば「田中栄三氏旧蔵資料」と

いった分類をされている訳ではなく、詳細な調査を終えてもいない段階であり、様々な条件を勘案して田中栄三氏の旧蔵資料であろうと判断したものもあり、概略に留めおくことにする。

前項で紹介した橘氏の1965(昭和40)年と66(昭和41)年の日記の中に、「塚田君と田中栄三氏訪問」といった記述が何度か登場するが、田中栄三氏と橘氏とはそれ以前、昭和38(1963)年に、田中氏が『明治大正新劇史資料』(演劇出版社刊)を上梓した際、その「あとがき」に次の様に記している。

「写真の資料は「映画の友」の社長橘弘一郎氏の御厚意で、同社の写場で、令弟の早田雄二氏が複写をして下さった。その数は千二百枚以上になった。その中から百七十六枚を厳選して口絵に出した。橘氏は「レイアウト教室」の著書で知られている、斯の道の唯一人の権威なので、私は口絵のレイアウトまでお願いした。私は同氏の御援助に心から感謝している。」

『明治大正新劇史資料』は、自らも新派、或いは初期新劇運動に加わった田中栄三氏の優れた著書の一冊だが、このように橘氏の日記の記載以前、即ち昭和38(1963)年にはレイアウトを依頼するような関係、親交が既にあったのであろう。田中栄三氏には改定を重ねた映画演技の指導書が何冊もあるが、例えば昭和15(1940)年1月に日之出書房という出版社から発行された『映画俳優讀本』は、映画世界社が発売所となっていて、その「序」には、「この本の出版に就いては、映画世界社々長橘弘一郎氏が、装幀その他、何から何まで一切の面倒を見て下さった。」とあって、戦前から既に橘氏との交流が始まっていたことが判る。この世界で早くから活躍を始めた二人であるから、当然と言えば当然の交流であり、橘氏による田中栄三氏へのインタビューも、こうした長いお付き合いが背景としてあった訳である。こうした取材が橘氏の発行する映画雑誌等に活字化されたものを目にした記憶は無く、また詳細は未調査でもあるが、初期映画史に通じている塚田氏の同行は、橘氏にとって好都合だった筈である。

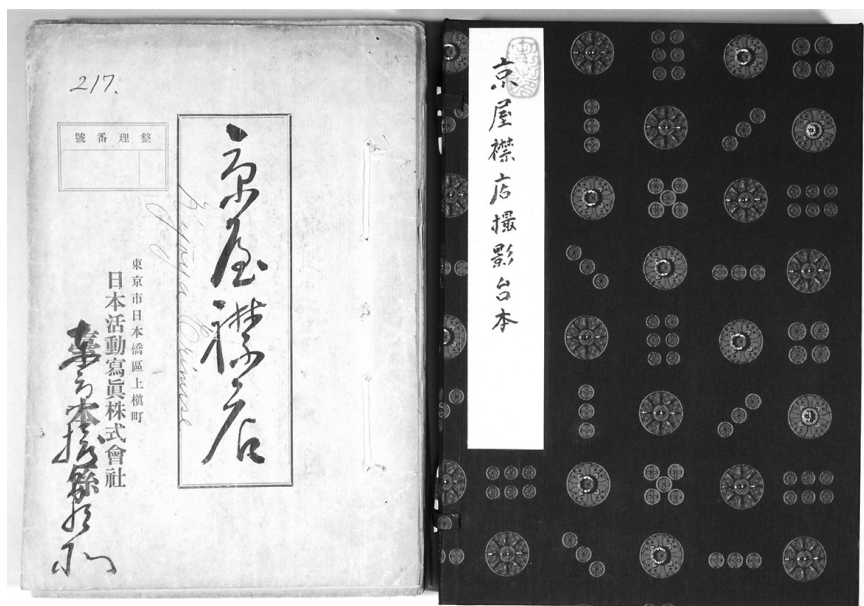
従って、田中栄三氏と塚田氏との交流は、このように橘氏に同行するかたちで自宅を訪問することで始まったものと推測する。訪問の主たる目的が田中栄三氏への取材だったとするのは飽く迄も推測だが、カメラマン(恐らくは実弟の早田氏であろうが)も同行することがあったのか、小さなテーブルを囲んで三人が写る写真も残っている。映画ジャーナリズムの大御所とも言える橘氏に同行を許さ



田中栄三氏(中央)を取材する塚田嘉信氏(右)と橘弘一郎氏(左)。
昭和41(1966)年

れた訳であるから、その過程で恐らくは塚田氏も田中栄三氏からの信頼を得ていったのではないか。

そして、田中栄三氏旧蔵資料であるが、初期新劇のプログラムの何枚か、そして向島に入所してからの、先輩である小口忠監督作品を含めての自身の監督作品の「香盤表」（現品には「日活東京撮影所用」とのみの表記）の数々、「日活東京撮影所図面」と題した向島撮影所の詳細な見取り図、更には田中栄三氏夫人玉枝氏が日活専務鈴木要三郎氏の娘（三女）であったことから、鈴木要三郎氏の関係写真数葉、等々である。勿論、いずれも極めて貴重な資料なのだが、それ以上に驚くべき資料が含まれている。何と、初期日本映画史の極めて重要な作品である「京屋襟店」のオリジナルの撮影台本があ



「京屋襟店」撮影台本と専用のタトウ。タトウは池上浩山人氏の製作か。

る。田中純一郎氏が『日本映画発達史』で、「女形の持つ顔廃美を極度に発揮した映画で～流麗に展開される舞台絵巻でも見るような感銘を与えた」と評価し、結果として日活が女形と訣別することになる、謂わば最後の歴史的な作品だが、良く知られる通り、この作品の台本は既に失われたものとされ(注10)てきた。昭和33年に、『キネマ旬報』別冊の『日本映画代表シナリオ集』第3巻に収録された際にも、わざわざ「撮影台本は今日残っていない」と断った上で、大正13年に新潮社から上梓された『映畫脚本 京屋襟店』を下敷きにしているのだが、ここでは「田中栄三氏が視力を弱くされて、短縮を一任された」という小林勝氏の解説が添えられている。つまり、この時に田中栄三氏本人に問合せなり確認作業がされた筈だが、田中栄三氏自身は撮影台本の存在を告げなかった、ということになる。まさかその存在を失念していた、ということも有り得ないだろうから、どのような理由からは不明だが、即ち「秘匿」していたことになる。そして台本を譲られた塚田氏もまた、生前には何らかの理由でその存在を明らかにすることが無かった。が、幸いにして、塚田氏以上に、その価値を理解し、保存するに適した人材も無いであろうから、田中栄三氏の選択もまた正しかった、と評価すべきであろう。

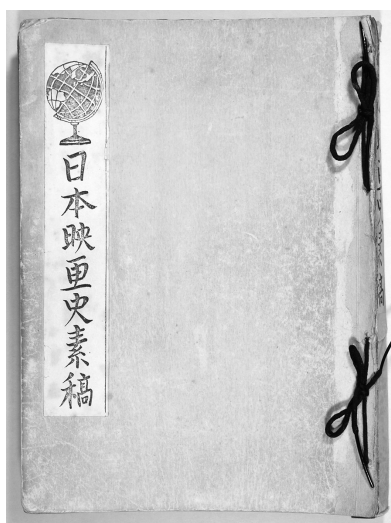
台本そのものの内容に就いては、まだ詳細な検証の時間的な余裕がなく、簡単に「存在」の報告だけに留まるが、恐らくは田中氏自らが発注して作らせた美麗なタトウに収められている。付け加えれば、但し、この台本が田中栄三氏本人から譲られたものであるか、栄三氏四女である田中竹子氏から贈られたものであるか、現状は何とも判断出来ない。また、何故ここで四女竹子氏から譲られた可能性があるかも、まだ明らかにする段階にない。謂わば、向島作品としても国宝的な貴重資料でもあ

り、その存在が明らかになった意義は大きいですが、その分、塚田氏も安易な発表、報告は避け、同時にまともな「田中栄三研究」さえ未だに登場しない映画史研究の現状を見渡しつつ、否、実際は嘆きつつ、であろうか、結果として「秘蔵」することに徹したと思われる。従って我々も、研究発展に資する為には、より一層の慎重さと覚悟を持って、いずれは全面公開へと漕ぎ着けたいと考える。

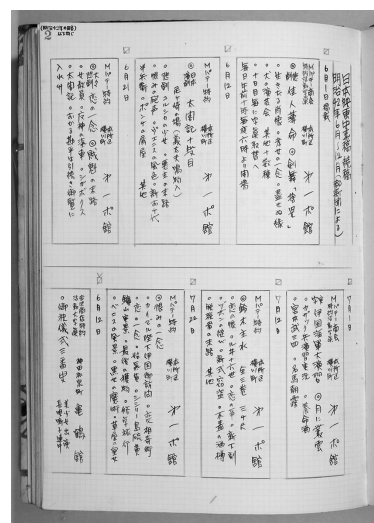
◇「日本映画史素稿」と、明治期新聞調査資料

塚田氏が、いったいつの頃から、初期日本映画史を明らかにする目的で新聞調査を意識するようになったかは、正確には判らない。ご自身も「いついつから志した」といったような文章も残していないし、また、私もお聞きした記憶は無い。だが、先に紹介した通り、1957（昭和32）年10月発行の私家版雑誌『映画資料』第1号発行に際しては、この映画資料研究会の紹介の冒頭に、「(1)「日本映画全史」の編纂 かつて、故水町青磁氏を中心に調査、一部発表された「日本映画史素稿」と同じ方法をとる克明にして精確無比、他に追従を許さない完璧なる日本映画発達史。既に上野図書館所蔵の各新聞について調査を開始しました。」という記載のあることから、既にこの時点ではそれを意識し、また既に調査を始めていることも判る。この文言にある通り、どうやら新聞調査の必要性のそれは『キネマ旬報』に戦前連載された「日本映画史素稿」に触発されたいいことも見当が付く。私も、塚田氏をお訪ねするようになった、かなり初期の時点で、「日本映画史素稿」の連載部分のみを合冊にしたものを拝見させて頂き、この研究の重要性を教えられたのだが、そうした合冊にすることで、連載号の1冊1冊を開く手間を省いていつでも手許に備えるようにした手法にも、少々驚かざるを得なかった。既にその頃には戦前の『キネマ旬報』は高額であり、まさか本誌を切り取ってまで、合冊にすること等はとうてい考えられなかったのである。当時、塚田氏もまた、「こうやって連載の号は余分に買って切り取ったんです。考えればもったいないことをしたね。」と、僅かにはにかんだように話されていたことを覚えている。勿論、その時には気付かなかったのだが、しかし、そこまでしなければこの連載を読み込むことは出来ないであろうし、実際にそこまですることで『映画史料発掘』へと結びついた自信をも語っていたのであろう。

実際に受け入れた塚田氏の「日本映画史素稿」の合冊は、「日本映画史素稿」以外の重要な記事の幾



合本「日本映画史素稿」の表紙。



合本「日本映画史素稿・II」の第1頁。

つかと共に、活字化されなかった柴田勝（旧姓・大森）氏による『都新聞』の調査を克明に書き写した分が、「日本映画史素稿・II」として一緒に綴じ込まれている。具体的には、明治42（1909）年6月か

ら同45(1912)年10月までの『都新聞』紙上の活動写真興行記録を調査し、筆写したものである。その頁数は実に113頁にもなる量であり、細かなペン字で、びっしりと、しかし丁寧に整然と書かれたものである。柴田勝氏の調査原本がどのようなものであったかまでは判らないが、第三者が見ても非常に判り易いように筆写されている。柴田勝氏も亦どれ程国会図書館へ通われたであろうか。マイクロフィルム登場以前の時代に、恐らくは何百回と調査に出向かれて新聞原紙をひもとき、活動写真に関する記事を見出す度にそれを筆写された訳である。柴田氏も、その後の塚田氏に多大な影響を与えたであろうお一人である。この合冊の文末には、「昭和三十八年五月三日午前三時三十五分完了」とある。写し終えたのは、深夜である。それに続けて、「日本映画史素稿」について」と題した「あとがき」が、矢張り同じペン字で添えられている。これも、以下に全文を引用する（原文は縦書き）。

「この素稿はキネマ旬報誌上に昭和十年九月一日号から昭和十四年六月二十一日号まで六十六回にわたって継続的に連載されたもので、明治二十九年映画の輸入から始めて明治四十二年半ばに至る映画の発達を綿密に調査した文字通り映画史研究の素稿である。

残念ながら単行本にならず、又明治期を了へることなく中絶したのは惜まれるが、幸い編者の一人大森勝氏未だ健在であり四十二年後半から明治末年に至るまでの調査原稿を保管されていることを知り、拝借してノートさせてもらった。ペン書きの部分がそれである。

かくて一応、明治期の東京方面の資料が揃ったこととなる。

現在では旬報誌上のものを集めることすら不可能に近いが、未掲載の原稿をも併せ蒐集出来たことは大きな喜びである。

この資料集成は天下に一つしかない貴重なものである。私の死後は誰の手に渡るかわからない。しかしこの文化的遺産は朽ちることなく、眞に映画を愛する人の手から手に、末代までも受けつがれんことを祈るや切である。

昭和三十八年五月三日 塚田嘉信

余計な解説は不要であろうが、敢えて付け加えるとすれば、「末代までも受けつがれんことを祈る」とあるように、この資料は塚田氏一人の利用では完結しないことを意味している。即ち、塚田氏以外の研究者にもいつでも利用が可能なるほど、それは見事に整理された形で残されている。体験的なことを含めて言えば、通常、歴史研究者の遺した資料群は、単行本や雑誌等、そもそもが完結した形状の資料であれば後世もまた利用は直ぐにも可能である。言うまでも無く、これは当然であろう。だが、例えば論文執筆に際しての草稿であったり、或いは準備の為のノートや切り抜き資料等は、例えそれがファイリングされたような状態であっても、簡単には読み込む作業も困難であり、それを残した研究者本人に就いての新たな人物研究であるなら兎も角、一般的な歴史研究資料としてはそのまま使えるということは、先ず無いと言って良いだろう。要するに、発表された研究成果を後世が受け継ぐことはあっても、研究過程で利用した資料類を、そのままの形で利用可能なように後世に伝えることを考慮する研究者は、そうは居ないであろう。それに対して、塚田氏の遺された資料群は、多くがそのことを明確に意識していたものと思われる。勿論、塚田氏自身にとって最良の形で纏められているのは当然のことだが、明らかに次の時代に繋がることを意識して、それらを遺した。古書店員時代にも多くの研究者の文献、資料整理に関わったが、私の知る限りでは、このことに限っても、その前例を知らない。

そして、この「日本映画史素稿」の合本もまた、その一つなのだが、それはまた、塚田氏38歳の、「日本映画史素稿」への評価、でもある。「天下に一つ」は、それに挑戦した研究者もまた「僅かに一人」、

を意味する。塚田氏の、謂わば、『映画史料発掘』への外堀を埋める作業であり、初期映画史の基本資料の構築作業の一環である。『松竹七十年史』の編纂作業と重なる時期でもあるが、同時に戦前の『キネマ旬報』を纏めて購入した時期でもある。が、『映画史料発掘』まではまだ7年の歳月がある。それをスタートさせるには、この他にもまだ埋めきれぬ外堀、が残っていたのだろうか。

国立国会図書館の新聞資料をマイクロフィルムで閲覧出来るようになったのは、いつのことであろうか。手許の『国立国会図書館三十年史』（昭和54年3月20日、国立国会図書館編刊）によれば、「当館のマイクロ写真関係施設ならびに機器類は昭和二十七年十月、米国のロックフェラー財団から設備資金として、四万一〇〇〇ドルが寄贈されたことによって、わが国におけるマイクロ写真の本格的なラボラトリーとして、総合的設備を整え、マイクロ写真製作を組織的に実施する基礎を確立した。」とあり、更に「新聞のマイクロ化の事業は、昭和二十七年年度に入って具体化され、新聞各社の協力を得て開始された。」と続く。だが、当初の作業は「昭和二十六年一月以降の新聞を、図書館資料として継続して、系統的に製作するのがその目的」だったという。初期映画史研究にとって必要な明治、大正期の新聞紙面のマイクロ化作業は、更にそれから十年以上も経過した「昭和四十年から長期継続事業として実施に移された。」という。つまり、戦前の「日本映画史素稿」の時代は勿論のこと、昭和四十年以前に明治大正期の新聞を国会図書館で調査した研究者は、皆一様に新聞紙面の実物を一枚一枚繰っていた訳である。

こうした中で、塚田氏もまた、「日頃から「素稿」になじみ、その恩恵に浴するとともに、その長所欠陥が次第にわかってくると「素稿」の欠如した部分を調査し、少しでもそれを補填し先輩諸氏の意志を生かして、なんとか信頼するに足る映画資料を残しておきたいという気持ちになった。」（『日本映画史の研究』、「はじめに」の一節）と、その「日本映画史素稿」に触発されたこともあり、国会図書館へ出向いて、活動写真の渡来時期に当る明治29（1896）年から30（1897）年にかけての、「できるだけ数多く」の各地で発行された新聞紙面の調査に取り組むことになる。

「ところがである。同館の新聞閲覧室に備付けの新聞検索目録、同館閲覧部が昭和44年11月1日現在で編集し、同館が昭和45年3月20日に発行した「国立国会図書館所蔵 新聞目録」には、「帝国図書館以来の旧上野図書館、及び衆議院図書館が収集整理したものを含め、昭和44年11月1日現在当館が所蔵している内外の新聞資料の原紙、複製版、翻刻版、マイクロフィルム版など約三〇〇〇タイトルが収録」されているのだが、その内また明治29～30年分が所蔵されている日本語の日刊紙を拾ってみると、報知新聞、国民新聞、毎日新聞、明治新聞、都新聞、日本、奥羽日日新聞（仙台）、山陰新聞（松江）、東京朝日新聞、東京日日新聞、東京新聞（めざまし新聞改題）、中外商業新報、中央新聞、読売新聞、万朝報、時事新報だけなのである。

東京はともかく、地方紙がわずかに二紙とは！ とても全国各地のことまで調べるなどということとは不可能だ。」（『日本映画史の研究』、「はじめに」）

普通一般(?)の研究者であれば、「万事休す」と受け止めて、調査を諦めるところであろう。木を見て森を見ず、ではなく、その木がまばらにばらばらと2本残るだけであり、既に森そのものはとうに失われてしまっている、ということではないのか（注・11）。

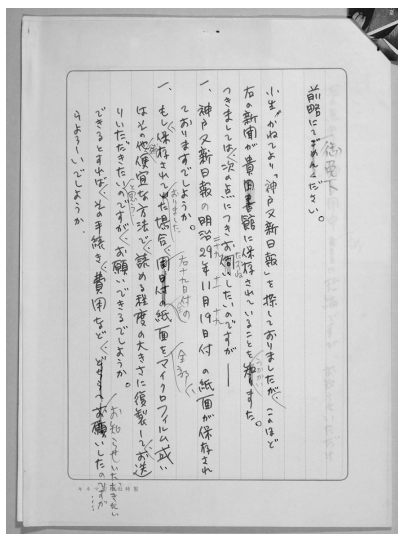
だがしかし、塚田氏はそれまでの研究と資料の蓄積故の自信、探求心、否、使命感、義務感から、「明治以来の新聞資料がこんな為体なものならば、かえってそこに、まだまだ資料探求の余地があり、新事実発見の可能性があるのではないか。」と考える。とは言え、「それを求めて全国各地へ調査しに出かけるだけの時間的経済的な余裕はない。」と、躊躇せざるを得ぬ事情もある。が、「だからといって、

荏苒として手をこまぬいていたのではいつまでたってももちがあかない。」として、初期映画史の森を、より明確に見出すために、新たな木々の探索をスタートさせるのである。その探索の過程と、検証の結果の報告が『映画史料発掘』であり、『日本映画史の研究』なのだが、調査し得た新聞紙面もまた、整然とファイルされて残る。初期映画史研究の為の調査は、残念ながら『映画史料発掘』第1号発行の半年前に開館した国立フィルムセンターではなく、国会図書館へと通って進められた。

これらの新聞ファイルは、ファイルそのものが全て手作りのもので大きさはどれも凡そA3サイズで、クラフト紙等の表紙を付し、紙面のコピー（紙面によっては感熱紙コピー）を収めるビニール袋を綴じ込んだものである。所謂市販の加除式のファイルであれば、追加の資料も適宜、必要箇所に綴じ込めるであろうが、黒い綴じ紐を使用しているので、ファイルの途中に追加する場合は、いったん紐を抜いて綴じ直す作業をしていることになる。それぞれのファイルは凡そ日付順に綴じ込まれ、またコピーの紙面は全面であったり、必要部分の拡大であったりするが、『映画史料発掘』での報告に対応するように整理されている。ファイルによって綴じ込むコピーの量も異なるので、頁数の統一も無いのだが、後年になって、ということは、即ち今日の状況を指すが、誰であろうと、そのままの状態新聞調査資料として利用可能な形で整理、保存されてきたものである。それぞれのファイルの内容紹介は、今後、資料目録として調査、整理の上、公開を予定しているが、調査途中でもあり、ここでは主だったファイルを、塚田氏がファイル表紙に手書きしたタイトルのまま、以下に紹介するに留めておく。

- ・「神戸又新日報 明治29年11月19日付全紙面入」
- ・「映画史料発掘 調査資料 関西篇 明治30年まで」
- ・「映画資料発掘 調査資料 関東篇 明治30年」
- ・「映画資料発掘 調査資料 関西篇 明治32、33年」
- ・「映画資料発掘 関東篇 明治31～33年」
- ・「映画資料発掘調査資料 明治30年 小樽新聞、扶桑新聞、岐阜日日新聞、福岡日日新聞」
- ・「日本映画史の研究 調査資料 明治34年分より」

これらのファイルは、殆どが新聞コピーを綴じ込んだだけのものであるから、資料価値を一般的な



明治29年11月19日付「神戸又新日報」紙面の保存を、神戸市立図書館宛てに問い合わせる手紙の下書き。
 実際の投函は昭和45（1970）年9月。便箋は「キネマ旬報社特製」。

古書市場の金銭的相場で計るならば、どれほどのものであろうか。寧ろ、市場価値は殆んど望めない、とすべきであろうか。だがしかし、映画史研究史上の歴史的な価値で判断するならば、そしてそれに塚田氏の調査資料という付加価値をプラスするならば、近年の映画史資料としては、そしてまさに塚田氏ならではのオリジナルということでは、これほどの貴重な資料もまた無い、と断言できるものである。塚田氏の研究姿勢を、その調査の努力の結晶そのものを物語って余りある、塚田氏の映画史学の原点なのである。規模の大きな図書館に出向けば紙面に含まれる単語からさえ、記事の検索が可能で今日からは、この資料のファイル作成に至る努力も一層理解しにくいであろうことは判るのだが、関東以外の土地の新聞は、それぞれの土地に居住する研究仲間の提供によるものであることも、また記憶に留めておくべきであろう。全国各地の研究者たちとの、そして恐らくは面識も無い遠隔地の仲間との信頼をどうやって育てていったのか、ということもまた興味深い事実ではあるが、塚田氏からの調査の依頼も、仲間からの調査結果の報告やコピーの送付も悉くは郵便が使われ、当然乍らその数も大量に残る。報告のあった調査結果は必ず『映画史料発掘』誌上で明らかにし、僅かな手がかりに過ぎない場合でも、軽々に扱うようなことは、決してしないのが塚田氏の、情報提供者への返礼、でもあった。それらの協力者の名は『日本映画史の研究』の「あとがき」でも紹介があるが、皆が一様に初期映画史をより明らかにしたいという、その一点への思いで紙面調査に協力を惜しまなかったのである。それも多くは無償だったと推測する。「活動写真渡来前後の事情」（『日本映画史の研究』のサブ・タイトル）の基礎資料は、こうして築かれ、その後への扉を開いたのである。

◇昭和20～24年「映画館番組記録」

塚田氏の、映画史への関心は、何も初期の時代に限っている訳ではない。別掲する、氏の著作一覧を御覧頂ければ、取り上げるそのテーマは、実は時代も多岐に亘っていることがお判りだろう。氏の関心は、言うなれば、映画史の明らかでない部分、明らかにすることが困難なテーマ、或いは明らかにすることが困難な時代に就いて、それらを明らかにすること、であった。言い換えるならば、映画史全体を見渡したとき、資料の最も少ない時代、或いは限られた資料しか残らぬ時期に就いて、可能な限りの資料を以てそれを裏付けとし、今、明らかに出来る事実を最大限、記録に残しておく、ということである。

最初期の渡来事実とその周辺事情、というテーマも勿論、その中では最優先されるべきものだった訳だが、もう一つの大きなテーマが、敗戦直後の映画上映の記録であった。一つには、塚田氏ご自身の鑑賞体験が戦時下に始まり、より一層夢中になって映画館へと通ったのがその時代であった、という背景も、そのことを後押ししたかと推測するが、戦時下の統制や検閲に加え、物資の不足、不安定な電力事情、敗戦後の全国各地に於ける空襲による映画館、映画フィルム、映画資料の焼失、といった様々な困難な事情を抱えた中で、それでも映画館へと足を運んだ人々が、では、何時、何処で、何を見ることが出来たのか。更に加えるなら、ご見物は一体それらの映画に幾らを払って見ていたのか。所謂、戦後映画史の、それは原点でもあり、出発点である。物事の始まりを正しく記録する、そのことに挑戦する、というのは塚田氏の一貫した姿勢であった。

昭和20（1945）年は、戦争末期に於ける空襲被害、統制、管理、検閲による情報不足、自由で独立したジャーナリズムの崩壊、またそれを伝える紙媒体の同様な不足、或いは加えて敗戦直後の情報の混乱、そして何より娯楽以前に、人々が生き抜くことそのこと自体が困難だった訳だから、複数の資料から多角的にその時代の映画上映を正しく記録する、等ということが極めて困難であることは自明のことであった。この時代、では新聞は東京での映画上映をどのように伝え、記録していたか。

『昭和20年 映画館番組記録』、『昭和21～24年 映画館番組記録』と、それぞれの表紙に鉛筆で手書きされたファイルがある。共に「塚田嘉信コレクション」とも書き添えられている。前者は、昭和20年の、『朝日新聞』と『読売新聞』の縮刷版から、それぞれの週の上映広告と、関連の記事をコピーした上で切り抜き、それを週別に貼り込んだものである。見開きで、右頁が1か月分の『朝日新聞』、左頁が1か月分の『読売新聞』で、つまり月別で見開きになっており、更に上段から第1週の広告、というように、週別で段を2段目、3段目というように追えるかたちになっている。縮刷版のコピーだから不鮮明な部分があるのは当然だが、両紙が敗戦の1年間、映画上映をどのように伝え、広告していたかは一目瞭然である。加えて、保存資料は、切り抜いた後のコピーもあって、つまりは該当する記事が紙面のどの場所に掲載されていたかも判るようになってきている。後者は、矢張り1か月分の広告を1頁に収めるが、1紙だけであり、しかも多くは実際の紙面の切り抜きによる。つまり、その時代に既にこうした切り抜きを始めていたということであろう。切り抜き以外の余白には、細かな書き込みもあって、この敗戦後の混乱期も、塚田氏の頭の中には具体的な作品名も含めて、東京の映画館地図がはっきりと描かれていたのではないだろうか。塚田氏16歳から17歳、である。

これらのファイルが、例えばそのまま私家版になったりはしていないので、飽く迄、手許の自家用資料である。最も困難な時代の基礎資料もまた、理想的なかたちで資料を残した。この資料も「空前」、であり、また新たに作成する作業が絶望的でもあることから、それは「絶後」と評価すべきものでもある。

◇新聞広告と、入場料金の変遷の調査

ここまで紹介して来た通り、塚田氏の映画史研究の基礎資料の大きな特徴は、新聞記事、広告に重きを置き、それを徹底して調査、蒐集する、ということがある。勿論、映画雑誌や単行本の蒐集も行って、それはそれでまた膨大な数ではあり、貴重な第一級のコレクションではあるが、それは寧ろ少なくない映画史研究者が志すことでもあって、塚田氏の遺された資料を見つめ続けていると、氏の場合はそれらは言わずもがな、として、つまりあるべき資料として当然配架されている、という気がして来る。一方、新聞資料に関しては、過去のものとはかく、同時代の新聞原紙を蒐集するに就いては、その時代、その時に保存するしか、先ずは方法が無いであろう。ごく稀に、古書即売展などに、新聞記事のスクラップ・ブックが売りに出されることがあるが、多くは映画愛好家によるもので、網羅的だったり何かの記録を系統的に貼り込んだりしたものは、先ず無いのが普通であろう。従って、敗戦直後に始まったと思われる塚田氏のそうした新聞資料蒐集は、戦後映画史の、これも第一級資料と言えるだろう。

前述した昭和21(1946)年から24(1949)年にかけての、上映広告のファイルとは別に、切り抜いたままの外国映画の広告が、昭和27(1952)年から揃っている。各年度ごとに紙袋に収められて、関心の無いものにとっては古新聞の山、ということであろうが、新聞であるから、その日、その時だけのものである。恐らくは、何十年という期間の、つまりは日課にされていた訳である。現状で確認可能な限り、年度別の紙袋に収められているのは昭和53(1978)年までであり、それ以降は全て纏めて一つの袋に収められていて詳細は確認出来ないのだが、恐らくは最晩年まで切り抜きを続けられていたのであろう。広告一枚を1点と数えるなら、全体では数千点にもなるのか。これらの広告以外には、例えば所謂、新聞の芸能欄に掲載される映画関係記事や、著名な映画人の訃報等に就いては、全くと言って良い程、何も切り抜きをされていず、寧ろ社会面に掲載される、例えば映画館の閉館であるとか、経済面に載る映画機材の新発明、といったものが残されているに過ぎない。

尚、日本映画の新聞広告に就いては、私は氏から「細谷さんに差し上げた」とお聞きした。細谷

勝雄氏の『日本映画索引』（平成5年5月、創栄出版刊）編纂資料として提供されたのであろう（注・12）。同書の巻末にも、映倫審査員の八巻晶彦氏と並んで、塚田氏の名が「下記の方は特に協力していただきました。」として明記されている。細谷氏に譲られた資料のその後のことは、私は何も知らない。

映画の封切広告とは別に、テレビで放映される映画作品の紹介欄もまた、一つの紙袋に保存されている。具体的には、『読売新聞』テレビ番組の紹介面に掲載された（と推測する）、昭和44（1969）年2月から同49（1974）年12月末までのもので、当初は「TVシネクラブ」というタイトルだが、昭和44（1969）年6月からは「きょうの劇映画」と変わる。「きょうの劇映画」となってからは、1か月分を纏めてホッチキスで留めてある。切り抜きには、作品毎に赤のチェックが入っていて、場合によっては原題が書き込まれているものもある。実は、『Motion Picture For Television Films』と題した綴じ込みノートがあって、雑誌『映画の友』誌上に掲載された各年毎の放映記録頁のコピーを含め、テレビで放映された劇映画が克明に記録され、別に作品名による「索引」ノートまである。「索引」は、原題が判明するものは、横文字でその原題まで書き込んでいる。この記録も、飽くまで自分用の記録であろう。テレビ放映初期には、毎年のようにわが国での未公開作品が数多く放映された（邦題はテレビ局担当者が独自に付けたのだろうか）こともあって、このようなノートを作られたと推測する。塚田氏が、もっとお元気であったなら、この記録も私家版に残して下さったのではないか。

これもやや臆気になりつつある記憶だが、確か塚田氏宅へ訪問していた初期のころであったが、その「きょうの劇映画」欄の切り抜きを見せて下さったのだが、「途中から面倒臭くなっちゃってね」と言いつつ、切り抜きではなく、続けてのその新聞は、テレビ番組の紹介面1面だけをそのまま保存されていた。「面倒臭い」結果が原紙1面を切り取って保存していた訳だが、それだけでもまた、かなりの量が積み上げられてかと記憶するが、従って、昭和50年に入ってから以降のものだったのであろう。残念ながら、今回受け入れた資料には、この分は含まれていないのだが、塚田氏がその後にご自身で処分されたかは不明である。

「映画は金を払って見る。かつては、これが原則であった。この原則が破られたときから、映画界の斜陽がはじまった。まったくの話、劇場用に作られた映画が毎日のようにテレビで放映されたのでは、映画館への足が遠のくのも当たり前である。」とは、塚田氏の私家版『“入場税と映画館の入場料金”の変遷』（1985年）の「あとがき」の一節である。今日に至るまでは、単館から更にシネコン時代、或いはビデオ・レンタル、DVD・レンタルから、ネット配信に加え、鑑賞もスクリーンやテレビ画面から、PCモニターやスマホ画面という、目まぐるしい鑑賞体験の“変遷”を辿って来ているが、従って全国共通であった入場料金さえ、一層、遠い過去のものへとなくなってしまった。その、遠いものとなってしまった時代の貴重な記録が、『“入場税と映画館の入場料金”の変遷』なのだが、僅かに10頁という冊子ながら、これもそれ以前も以後も、何処にも記録の無い、塚田氏ならではの調査に裏付けられた克明な記録集である。

この冊子の最終頁には、「日比谷映画劇場開場以来の正月興行入場料金一覧」が収録されていて、ひと目で料金の変遷が辿れるよう、配慮されている。「日比谷映画が、開館以来ずっと同じ建物で封切館として続いているからね」と、この冊子が届いた後に、何故、日比谷映画劇場を選んだのか、その理由を話されていたことを記憶している。良く知られているように、日比谷映画劇場は50銭均一という低料金を以て昭和9（1934）年2月1日に開場し、所謂日比谷映画街の入り口にあって、塔が聳え立つ独特の外観が、昭和59（1984）年10月の「さよならフェスティバル」まで多くの映画ファンを迎えていた。そして、この冊子の裏付け資料がB4サイズのファイルになって残されているが、昭和27年末（昭和28年の正月映画作品ということだが）からは、ご自身が切り抜かれた新聞広告がファ

イルされている。また、これとは別に、「入場料についての資料」と題したA4のファイルが4冊あって、「その一 浅草六区関係」、「その二 昭和六年以降」、「その三 昭和四十六年以降」、「その四 昭和六十三年以降」と、それぞれ分類されているが、この三と四に就いては、ほぼ全てが新聞記事資料である。この僅か10頁の冊子に費やされたエネルギーと膨大な時間を、これらのファイルが語っている。それでも尚、塚田氏の調査にしては極めて稀なことだが、昭和19(1944)年末、即ち昭和20(1945)年の正月料金が「不明」となっている。作品が「狼火は上海に揚る」であることは判明しているものの、本文中でも、「昭和19年7月13日 この日より東京都映画館改正入場料金実施。」の「注」に、「これについては資料が発見できず、詳細不明。」とある。先に紹介した『昭和20年 映画館番組記録』でも、昭和20(1945)年1月1日付の『朝日新聞』、『読売新聞』の紙上の「狼火は〜」の広告のいずれもが、「白系三日迄上映中」、或いは「白系三日まで」とはあるが、料金の記載が無い。敗戦の年の入場料金だから、大きな課題である筈だが、未だに不明のままである。従って、不明の年度を残したまま活字として発表することは、塚田氏にしてみれば恐らくは納得のゆかぬことではなないだろうか。これは余談になるが、私自身が長く演劇の仕事をする中で、大変お世話になった脚本家の水原明人氏(2016(平成28)年8月死去)から、ご実兄は、日比谷映画劇場の開場に際して一般公募した支配人に一等当選された人物、とお聞きした。

◇映画館プログラム

これまでも触れて来た通り、塚田氏蒐集の文献、雑誌、資料類は、欠号無く揃っていること、その第1号であること、に最も比重が置かれていることが判る。物事の始まりを明確に位置付けること、歴史を語るなのであるから、物事の流れもまた途中で途切れさせない、ということである。映画館プログラムのコレクションもまた、その例外ではない。そしてまた、この資料も見事にファイリングされて、どの研究者が手にしても、どういった目的を持ち、何故その資料がコレクションされているのか、実に明確に判るように配慮されている。「この文化的遺産は朽ちることなく、真に映画を愛する人の手から手に、末代までも受けつがれんことを祈るや切である。」と書かれていたのは、確かに「日本映画史素稿」の合冊だけであるが、映画館プログラムのコレクション類も、十分にそれに値するものである。代表的なファイルの背に書かれたタイトルを列記する。

「映画館のプログラム(関東大震災以前のもの)」、「映画館のプログラム(関東大震災以後のもの)」、「戦時中のプログラム」、「北京の映画館のプログラム」、「トーキー 天然色映画 空中映画 耐光映画 立体映画」、「横浜オデオン座ウイークリー」、「終戦直後の初開場初公開プログラム」、「M.P.E.A アメリカ映画 WEEKLY」、「名画座コレクション」、「ミニ・シアター」、といったものである。

それぞれのファイルのプログラムのリスト化は未着手なのだが、私が氏の生前に見せて頂いたのは、この内の「M.P.E.A アメリカ映画 WEEKLY」1冊のみである。これも、ご自宅にお訪ねするようになった最初の頃であったと記憶するが、パラパラとファイルを広げて、「揃っているんです」と言われ、どう返事をしたものか、否、何も言葉が出なかったことを覚えている。幾ら戦後の資料なのだから残っている確率は大きいものと言っても、敗戦直後の混乱した時代のものである。当時の私の感覚では、そもそも揃えるという発想の対象となるようなものですら無かった。従って、一体何冊あれば揃いなのか、何時から何時まで発行されたものなのか、何も知識が無かった。とは言っても、その時の塚田氏の態度は、決して自慢するような素振りも無く、また蒐集の苦労を語るといったことも無く、せいぜい折角出かけて来て呉れたのだから、余り見ることの出来ないものでもお目に掛けましょう、位の雰囲気であった。だから、恐らくはその分、余計に印象に、記憶に残ったのであろうか。

通常なら、パンフレット、プログラム類のコレクターは、例えば特定の監督の作品や、出演俳優のもの、或いはSF物やホラー作品といったジャンルで蒐集するのが一般的であろうか。特定の国別、或いは時代を区切って、更には映画会社別といった例も、恐らくは稀であろう。従って、塚田氏のコレクションは極めて特殊、独特のものでもあり、例えそこに趣味的要素があったとしても、究極には映画史研究を目的とした資料コレクションであろう。少なくとも、私はこういったコレクションを他に知らないし、こうしたコレクションの方法も塚田氏に教えられたものである。

それぞれのファイルのリストの公開までには、まだかなりの時間を要するかとも思うが、ここでは紙幅も限られるので、最も塚田氏らしいコレクションでもある「終戦直後の初開場初公開プログラム」の内容の一部を紹介するに留める。所謂「クリア・ファイル」だが、厚さが6センチ程の、透明ビニールのポケットを加除出来るもので、その1枚1枚に白い用紙にプログラムの内容を上辺にタイプしたもの、つまり解説文を書いたものを入れてある。その解説文を冒頭のプログラムから順に、以下で紹介する（○印は、便宜上、私が付したもの。解説を短く省略して転記したものもある）。

- 昭和20年10月3日 帝国劇場 戦後再開第一回 東宝松竹提携十月興行 尾上菊五郎一座「銀座復興」
- 昭和21年2月28日 新着アメリカ映画第一回封切「キューリー夫人」
- 昭和21年2月28日 新着アメリカ第一回封切「春の序曲」
- 戦後の日比谷映画劇場のプログラム
- 戦後の日本劇場のプログラム
- 昭和21年6月13日 『日活週報』第一号 「夜光る顔」
- 昭和21年8月15日 S.Y『MUSASHINO NEWS』No.1 「情熱の航路」
- 昭和21年11月5日 ソヴェト色彩長篇記録映画第一回封切 「スポーツ・パレード」
- 昭和22年3月25日 戦後洋画ロードショー第一回 スバル座 「アメリカ交響楽」
- 昭和22年12月16日 スバル座 洋画ロードショー復活 「足ながおじさん」
- 昭和22年9月30日 ソヴェト劇映画第一回封切 「モスクワの音楽祭」
- 昭和22年11月4日 ソヴェト色彩劇映画第一回封切 「石の花」
- 昭和22年12月2日 イギリス劇映画第一回封切 「第七のヴェール」
- 昭和22年12月20日 イギリス色彩短篇記録映画第一回封切 「エリザベス姫エヂンバラ公御成婚の盛儀」
- 昭和23年1月24日 フランス劇映画第一回封切 「美女と野獣」
- 昭和23年2月10日 帝国劇場 洋画ロードショー第一回 「悲恋」
- 昭和23年4月2日 「花ひらく」特別披露興行 帝国劇場
- 昭和23年4月6日 アメリカ色彩長篇漫画映画第一回封切 「ガリヴァー旅行記」
- 昭和23年9月21日 アメリカ色彩劇映画第一回封切 「ステート・フェア」
- 昭和23年9月28日 イギリス色彩劇映画第一回封切 「ヘンリー五世」

この辺りまでとしておこう。このように、日付順に、第1回の封切に当る作品の悉くを、そのパンフレットで構成、コレクションしたファイルなのである。これが昭和20年代末まで延々と続く。だが、しかし、流石の塚田氏であっても、例えば2番目の「キューリー夫人」のパンフレットはコピーであったり、その次の「春の序曲」は何も収められていない。更に、それに続く「日比谷映画劇場」や「日本劇場」の戦後プログラムも第1号は未収である。つまり、いずれは入手出来るであろう、或いは入

手すべき資料という心積もりであったことが判るものである。

そして、ここでも些か余談になるのだが、実はこのファイルの最初に収められた帝国劇場の「銀座復興」(注・13)のプログラムは、私が提供、差し上げたものである。私が入手したのも既に40年程前のことになろうか、日頃からあれこれとご指導を受けている身としては、その御礼をどうしたものか常々考えていたのだが、こうして私の体験からも珍しいと思える資料は、お目にかかる際に時々、持参していたのである。これもその一つという訳だが、『東宝三十年史』(昭和38年1月25日、東宝株式会社刊)にも「太平洋戦争が終結して一番さきに、東京市民に一流の、堪能できる芝居を見せてくれたのは帝劇に出た、尾上菊五郎一座でありましょう。～(中略)～六代目菊五郎は、東宝が準備して誘いに行った企画に賛同、一座をひきいて上京すると、直ちに帝劇の『銀座復興』と『鏡獅子』の幕を明けました。」と書かれている通り、勿論、日本の戦後の本格的な興行が「銀座復興」から始まることは先刻ご承知だったが、プログラムの実物は初めて手にするようであった。そして、何日か後のことであったか、「2つ折りの間に1枚挟まっているでしょ。これが、その時見に行った人は、そんなの無かったって。」と話されたことを覚えている。このプログラムは、即ちB5ほどのものを2つ折りにし、更にその間にB6サイズの菊五郎による「御挨拶」を印刷したものが挟まっているのである。裏面は千代田印刷という会社の広告だが、実は如何にも菊五郎らしい「御願ヒ」文が、挨拶に続けて載っているのである。2つ折りのプログラムも、裏面には「虎の尾を踏む男達」と「歌へ！ 太陽」の2本が「製作進行中」として宣伝されている。知られている通り、黒澤の「虎の尾を踏む男達」はこの時期に完成を見るが、占領軍によって上映が禁止されて7年程お蔵入りとなり、一方の「歌へ！ 太陽」は東宝の戦後第1作となる作品であるから、東宝映画の資料としても貴重ではあろう。このプログラムは、私もその後は一度も出会ったことも無く、また文献等での図版でも紹介されているのを知らない。こうして再び、塚田氏に差し上げたものを手にするとは思ってもみなかったが、結果として塚田氏のコレクションがこうして国立映画アーカイブに収められ、このプログラムもその中で保存されることになったのは幸いだった。

そして、ここでも改めて繰り返すが、塚田氏のこうしたプログラム1点1点は、今日のようなインターネット上で検索して探す、等という安直な手法でコレクションを築く環境、時代では無かったことにも注意が必要である。常に古書即売展等の販売目録に注意を払い、或いは古本屋を歩き回り、即売展へも足繁く通って、それらの1点1点を揃えていったのである。その為には、当然のことだが事前の調査、学習が欠かせないことは言うまでも無い。映画史を研究し、それを語るには、どういった資料を必要とするかということ、徹底して文献を読み込んで記憶していなければならない。誰でも簡単に真似の出来るようなことでは、コレクションは築けない、という環境だったのである。勿論、これまで紹介して来た通り、映画館プログラムだけを集めていた訳では無い。映画雑誌の欠号も記憶し、未収集であるかどうか覚えておき、未知の映画資料に出会うことがあればその価値を見分け、判断し、より一層のコレクションの充実、体系化を図っていたのである。凡そ、個人で可能な範囲を超えるようなことへの挑戦の中の、このプログラム・コレクションも、その一つでしかない。

そして、このプログラム・コレクション類も各テーマ毎のものが完蒐されたなら、また何か特別な私家版の作成でもされたであろうか。この状態でも十分に充実したコレクションだから、プログラムを視覚的に使ったの、そうした成果を発表されることも無かったのは勿体なくもあり、また個人的には些か残念でもある。

◇水野一二三氏旧蔵資料

水野一二三氏の名は、『映画史料発掘』や『日本映画史の研究』が無ければ、今日、映画史研究者たちにとってどれだけ重要な人物であったか、余り認識されずに居たかも知れない。否、未だに映画史研究者には広く認識されているとも思えない、と言ったら言い過ぎであろうか。そもそも、戦前の『キネマ旬報』に連載された「日本映画史素稿」自体が、塚田氏によって繰り返し言及されたことで、謂わば息を吹き返し、命脈を保っているような状況なのだから、その中で関西方面の調査、研究を担った水野氏の業績の全体像を正しく評価し得なかったとしても、あながちその後の研究者ばかりの責任と責めることにも、しかし多少は無理があるのかも知れない。加えて、氏の発表された論考等も研究者による私家版誌上であったり特殊な業界紙だったりしたこともあって、顧みられる機会に恵まれなかったとも言える。更には、広島原爆で被災された為にあらかじめの蒐集資料を失い、戦後はその後遺症にも苦しまれたようで、調査、研究も思うに任せなかった不幸があったと思われる。

私自身もまた、塚田氏と出会うまでは恐らく水野氏の名を意識したことは無かった。否、既に記憶は朧気だが、或は全く未知の名前、人物だったかも知れない。仮に何かの文献で目にしていたとしても、その名前に注意し、意識することは無かった筈である。例えば、田中純一郎氏の『日本映画発達史 I』に於けるキネトスコープ初公開の際の『神戸又新日報』紙上の広告図版にしても、その発見者が水野氏であり、それは戦前の「日本映画史素稿」の中で発表されたという、極めて重要な出来事に全く触れずに済ませているのだから、当時の私が水野氏の名を知らなかったとしても、言い訳めくが、それも当然でもあったという気がする。

しかし、水野一二三氏こそは、塚田氏の映画史研究にとって最も影響を与えた、或は与え続けた人物であると思われる。また、塚田氏とのお二人の出会いの時期を考慮すれば、実はこの論考でも真っ先に取り上げなければならない人物であろう。「日本映画史素稿」の連載記事と同様に、それを担った水野氏の存在もまた、塚田氏の映画史学の原点であったように思えるのだが、それを敢えて最後に紹



水野一二三氏。撮影は田中純一郎氏。

写真の裏面には、田中氏の筆跡で、「大阪の宿にて 純一郎写す 台風13号接近の日」の書入れがある。
昭和37(1962)年7月27日(金)

介するのは、水野氏の名を塚田氏から直接にお聞きした記憶も無く、また、「旧蔵」とするには、纏まった点数でもなく、したがってコレクションと呼べる形態ではないからでもある。それでも尚、紹

介を避けて済ますことも出来ないのは、『映画史料発掘』や『日本映画史の研究』に何度も繰り返し繰り返し眼を通すならば、水野氏の再評価も喫緊の大きな課題でもある、と考えるからであり、それは今後、この塚田氏資料に含まれる水野氏旧蔵資料（の公開）を抜きにしてはあり得ないからでもある。

『日本映画史の研究』の「あとがき」に紹介されている水野氏の協力というものは、「『日本映画史素稿』未発表原稿並びに各種調査資料」とあって、それは「生前『映画史料発掘』発刊前にご厚誼を賜りました。」と続く。そもそも『映画史料発掘』の発刊の切っ掛けは、小松宮がキネトスコープを観覧した日付への疑問だった訳だが、この観覧を伝える『神戸又新日報』の記事の発見に就いて、『日本映画史の研究』では、「田中純一郎氏のこの本（『日本映画発達史』I巻のこと。本地注）では、ひとつもふれてはいないが、もともと、この記事の発見者は故水野一二三氏で」とあって、「水野氏の発見は日本映画史の研究でも最も高く評価されてよいもの」と位置付けている。更には、「昭和38年1月、私が二度目に水野氏にお目にかかったとき神戸又新日報の「殿下は一昨日…」の記事の写真版を頂戴した。」とあって、これが「あとがき」で触れている「各種調査資料」であるらしいと判断出来る。つまり、塚田氏は少なくとも水野氏に2回は会っていて、何らかの資料を譲り受けていることは、『日本映画史の研究』でも書かれている訳である。

以下は順不同ではあるが、その水野氏資料を紹介してゆくことにする。まず、「水野一二三氏調査資料」と、クラフト封筒に黒マジックで大書きされたものがある。中は水野氏旧蔵の古いスクラップ・ブックである。調査資料と言うよりは、水野氏の身辺資料と、氏原稿が掲載されている業界紙の切り抜き等が貼り込まれている。その最初は、何と「戦時災害ニ因ル罹災証明書」、つまり広島に於ける原子爆弾罹災の証明書なのである。私たちは、『日本映画史の研究』の中で塚田氏が水野氏の被災を、「昭和20年広島で被爆し、奥さんと三人の子供さんと共に、それまでに調査したあらかたの資料を失い、氏自身も瀕死の重傷を負った。」と書かれていることで、それを知っているのだが、それを証明するものが残っていたのは驚きであると同時に、即ち我が国の映画初公開を突き止めた研究者自身の歴史資料としても極めて貴重であろう。発行は昭和20（1945）年9月3日付で、岩国市（役所？）の孔版文字が見える。「家屋全壊ス 岩国病院入院中 敏子、和夫 死亡ス」のペンによる書き込みが何とも痛ましい（注・14）。この他、スクラップには『東宝タイムス』という東宝の関西支店が発行していた業界紙が貼り込まれ、これには第1号から水野氏が「日本映画草創記」という連載を執筆している。これも、『日本映画史の研究』の中で、「その後に私は昭和21年4月1日創刊になる「東宝タイムス」（東宝関西支店営業部宣伝課発行）というタブロイド版の宣伝新聞を入手したが、その創刊号から水野氏が「日本映画草創記」という研究を連載している。」とあって、既に誌名と連載記事のことは知ってはいたのだが、塚田氏はどこから入手したかまでは書かれていなかったため、まさか水野氏本人の遺品であるとは気付かなかった。但し、残念乍ら欠号があって連載が何回続いたのかまでは判らず、その全体像は不明である。また、スクラップには荒木和一氏からの葉書や、水野氏の写る写真も何枚か貼り込まれている。

『日本映画史の研究』では、荒木和一氏のヴァイタスコープ輸入を取り上げた章の中で、例のキネトスコープの「残骸」を真ん中にして、水野一二三氏と荒木和一氏とが並んだ写真が収録されているが、この前後に、「現在私の手元に保存されている荒木氏から水野一二三氏に宛てた書簡」と書かれているのだが、これも、何故塚田氏が保存することになったか、までの記述が無い。水野一二三氏が荒木和一氏と親しくされていたらしいことは、他の水野氏の書かれたものからも想像はしていたが、水野氏の手許にあった荒木和一氏関係の資料は、さほどの点数ではないであろうが、恐らくはそのまま塚田氏に譲られたかと推測する。紹介にあった書簡も、そしてヴァイタスコープの残骸の写真も、これは複写の可能性もあるが、古い紙焼きで残されている。

この他、「日本映画史素稿」用の手書きの元原稿（一部は『日本映画史の研究』に収録されている）や、『映画どうらく』No.3に掲載された「明治時代の説明振り」の元原稿等、『松竹七十年史』のところでも触れたが、その編纂協力の折りの関西での興行、公開の調査結果を伝える葉書も大量に残っている。そして、『映画どうらく』のNo.5（1964年9月10日刊）は水野氏の追悼号なのだが、この中で細谷勝雄氏が「昨年の秋上京の際、我々同行の連中と会い大いに語ったことが今更のように思い出されてならない。～（中略）～たゞ「マキノ映画について」の研究発表の録音テープが残ったのがせめてもの慰めで、これが生前の氏を偲ぶ唯一のかたみとなってしまったわけだ。」と書いた、その録音テープがそのままに残る。どういった切っ掛けから水野氏を招くことになったのか、またそれを録音することになったか、その前後の事情は不明だが、録音日時は昭和38（1963）年10月20日の午後、場所は塚田氏宅である。参加者は、塚田氏、細谷氏の他は、梅村紫声、大森勝、御園京平、吉田智恵男の、ということはいつもの研究者仲間全員が集まった訳である。テーマとなったマキノ映画に就いては、その後、御園氏の私家版『かつどう』No.2誌上で、「遺稿 マキノキネマの足跡」の内容にも添ったものだが、水野氏ご本人の音声が残されたことは、私達からすれば奇跡とも言い得るものであろう。昭和32（1957）年の「映画資料研究会の仕事について」の中に、「(4) 生きている映画史・映画人聲のライブラリー」という項目があったが、その折りの申し合わせを思い出して録音テープに残したのであろうか。

水野一二三氏は昭和39（1964）年8月3日、被爆の後遺症で亡くなられた。享年57。そのことは『日本映画史の研究』の本文中にも書かれている通りだが、塚田氏はその後もご遺族の一人である水野潤一氏（ご子息）に対しても丁寧なお付き合いをされていたようである。『映画史料発掘』は、当然のこと乍らその第1号から水野一二三氏の調査、研究にに触れているが、ことに第3号の「活動写真最初の一年〈明治三十年〉の記録」は、その表紙に「柴田勝 水野一二三 塚田嘉信」と連名を記載し、この三氏の研究であることをわざわざ明記している。このことから、塚田氏は恐らくそれまで発行した『映画史料発掘』の三冊を潤一氏にも贈られたのであろう、潤一氏からの礼状が残る。「父の名を附した研究物が貴方さまのお手によってこの世に生まれた事は、故人にとっても如何ばかり大きな喜びであろうかと存じ、故人のためにも心から御礼申し上げます。」と、昭和46（1971）年5月10日消印の、その葉書の文面にある。塚田氏の、水野一二三氏への思いはこうしたものであった。

◎むすび、或いは映画基礎資料の完備へ向けて

以上が、塚田嘉信氏の遺された映画資料コレクションの柱、大要である。とは言え、まだまだ紹介すべき資料は、それこそ山の如くある。ここでは、残念乍らその為の時間も無く、また紙幅にも余裕が無い。より正確に、正直に記せば、言及した資料類でさえ、厳密なリスト化には未着手のものが多く、また、どのような整理方法が可能なのか判断しにくいようなものも含まれていて、一般への公開に向けても課題が山積しているのが現状である。

塚田氏の『映画史料発掘』や『日本映画史の研究』に接している映画史研究者は少なくない筈だが、それでも今回こうして、塚田氏の業績を纏まった形で発表するところまで辿り着いたことで、今後の作業への新たな足掛かりにはなったであろう。別掲の「年譜」を御覧頂くまでもなく、塚田氏の生涯は、正に映画史研究一色だった。その為の映画資料、映画文献の蒐集に費やされた。私が氏と出会ったのが古書店員時代だったこともあって、従って何度となくお会いしても、当然のこと乍ら話題は映画史と古書資料のことだけであった。塚田氏も普通の人間であるから、例えば旅行に出かけたりうまい料理を食べに行ったり、ということがあっても不思議ではないだろう。だがそのような

ことに関心がある様子は全く無かったし、つまり他のあらゆる可能性を排除して研究に、蒐集に、それだけに専念された。しかも、それが基本資料の悉く、否、悉くが大袈裟ならば、可能な限りと言ってもいいが、それを揃えることであった。何故そのようなことを思いついたのか、何故そのような作業に挑んだのか。答えは、それが無かったから、であり、他にする人間が居なかったから、更にはそれをする機関も無かったから、である。それなくしては、映画史研究もスタート・ラインにさえ立てない、と考えられたから、である。誰でもが調べれば明らかになることを、誰もが手を付けない怠慢を嘆き、安易な引用で済ますものまで歴史研究として大手を振っている現状を警告、告発し、その解決策が自ら行動することであった。塚田氏にしてみれば、前例が無いのであれば独力で挑戦し、開拓し、自らが前例になれば、前例を作ればいいだけのことと、それを誇る訳でもなく、如何にも必要だからこそ当り前の仕事をしているだけ、ということだったのではないだろうか。塚田氏はそれを声高に吹聴したり、大袈裟に他の研究者に対してアピールした訳でもない。泰然自若と構えつつ、明鏡止水の言葉の例え通り自らの研究姿勢、研究成果が、自ずとそのことを語る、という態度で貫かれた。成し遂げた仕事は、自らを問い続けた結果、としてある。

本文中でも繰り返し取り上げた『キネマ旬報』の「日本映画史素稿」が、まさに映画史研究がスタート・ラインに立つ為に、科学的な歴史研究としての新たな方法の確立を目指したものとして、映画史研究の最初の大きな転換点であったことは間違いない。それもまた、キネマ旬報社長田中三郎氏の提唱に込め得る水町青磁氏、大森（柴田）勝氏、水野一二三氏といった逸材が馳せ参じたことで為し得た。だが、その転換点も基礎資料の発掘途中で、戦時下という悪条件から中絶し、一冊の書物となることも無かった。その後は、戦後になってからの、田中純一郎氏による『日本映画発達史』の完結が次の転換点であろう。映画が大衆娯楽であること、優れた芸術、文化として発展したこと、大きな経済的効果をもつ産業としての浮沈、それらを簡潔に伝えることで、映画史研究もまた、歴史研究としての評価を得る地位までに独力で発展させた功績がその後にも与えたものも、また計り知れないものがあつた。恰も重箱の隅をつつくかの如くの無定見な批判ばかりの対象となって来た『日本映画発達史』だが、映画業界の奥深くまで知り尽くした田中純一郎氏にしか記述し得ない歴史書であり、今以て第一級の必読書である地位は些かも揺るがない。第5巻完結の際、新藤兼人氏が「これは単なる映画史の記述ではない、日本映画のなかを生身で生きぬいた一人の男の、熱い「語り」である。」（『シナリオ』昭和51年10月）と評したその視点で読み解く作業こそが、今、改めて求められる。

塚田氏はそれらを踏まえた上で、「日本映画史素稿」が提唱しながらも、資料の発掘報告の段階で中絶したことでなし得なかった点を改めて問題提起し、更には問題提起に留まらずに自らがその解決へ向けて、大胆な挑戦に取り組み始めた。その研究課程で、映画史研究にとって歴史資料と向き合うということはどうあるべきか、ということをも問いかけ続けた。「日本映画史素稿」連載時の読者がどれほどの規模、人数であったかは判断しかねるが、いずれにしても次へのステップを踏み出すには、塚田氏の登場を俟たねばならなかった。そして、その挑戦こそが『映画史料発掘』であり、僅かに映画渡来の最初の2年間を集約した『日本映画史の研究』を以て、更に新たな転換点を生み出した。『日本映画史の研究』以後は、明確な資料の裏付けと、新たな資料発掘が呼び起こす大胆な推測無しには、映画史研究も説得力を持たないという共通認識を研究者たちに齎したことは、些か誇大評価めく言葉だが、正に衝撃的であった。新聞記事による同時代の記録と評価を、如何に再評価するのか、といったことを研究者に突き付け、それがまた新たな歴史の原点と成り得ることを明確に提示した。それを受け止める研究者が、またその事実をどう評価し発展させるのか、が次の時代の課題となったのである。その流れをこうして見つめてみれば、塚田氏の登場は必然でもあったのであろう。そして、今回、国立映画アーカイブが御親族の御厚意によって、それらの研究成果の裏付けとなった資料

郡を受け入れることになり、今後の一般公開へ向けての作業がスタートしたことは、いずれは塚田嘉信氏コレクション公開が、また更なる次の映画史研究の転換点となるであろうことを予感させる。明確な目的を定めて、それへと向かって小さな作業を積み重ねることで、新たな課題を見出し、その成果こそが再び次の成果に結びつく。塚田氏のコレクションはそのことを語り掛けていることをつくづくと感じるが、塚田氏コレクション公開という新たな「その後」が、いずれは普遍化する。それこそが、その時こそが「日本映画史素稿」合冊の後記に記された「この文化的遺産は朽ちることなく、眞に映画を愛する人の手から手に、末代までも受けつがれんことを祈るや切である。」の声に応えたと言えるのであろう。塚田氏のコレクションは、勿論自身の研究の為の資料であることは言うまでも無いことだが、一方でまた必ずや次の時代へと繋がるものであることを強く意識されていた。私たちは、再び映画史研究の基礎資料とは何か、という問題を再考し、研究の基本を見つめ直すことが求められていることを、そして、いずれは必ずや基礎資料を揃えるという覚悟をも、同時に求められていることを、塚田氏のコレクションは教えてくれる。

歴史研究は、ひたすら過去の出来事、事実を明らかにする為の資料の発掘を続け、その価値、評価を定める、即ち勝利も敗北も無い永遠に続く闘いでもある。それはまた、自身との闘いであることも意味する。塚田嘉信氏の遺された資料は、そのことを静かに、しかし重く語り続けるであろう。

（完）

謝辞：本研究はJSPS 科研費 20K00164 の助成を受けたものです。

（注・1）『日本映画史の研究』上梓後に再開した『映画史料発掘』は、『映画史料発掘／号外』として、『日本映画史の研究』その後 一明治30年の興行記録・補正一』の題名で発行された。発行日は「MCMLXXXI」と刊年がローマ数字で表記されている。つまり「1981」（昭和56）年とあるのみである。この印刷費の請求書は同年6月18日付で発行されており、7月頃に発行、配布されたものと推測する。

（注・2）初めて塚田氏に差し上げた私の書簡の内容は以下の通りである。便箋7枚に万年筆で縦書きに綴ったものだが、便宜上、ここでは改行のみ生かして横書きにする。旧字（正字）や旧かな遣いの箇所は、心酔していた三島由紀夫の影響が残っていたのかも知れない。40余年前、25歳のときのものである。尚、一部の明かな誤記（文字の間違い）は訂正した。

「謹啓

突然お手紙を差し上げます失礼を御許し下さい。

小生、都内の某古書店に勤める傍ら映画書誌の研究を細々としているものです。

四～五年程前に映画の専門学校を卒業して以来、映画製作の道を断念して、同じ位に好きな古書の道を選び、どうせならば好きな映画と古書とを合わせた映画書誌の勉強でもしてみるか、と現在に至っております。

そして、先日遂に『實地應用近世新奇術』の第三版なるものを偶然にも入手することが出来ました。其の後、友人より先生の著されました「映画史料発掘」のコピーを送ってもらい、比較してみますと、次々と疑問が出て來、是非とも、此の書に関して先生の御教示を仰ぎたく、そして亦、或は先生の御研究の参考として少しでも御役に立てば思い、思い切って筆を取った次第です。

書誌學に関しましてはまだまだ駆け出しのシロウト由、御分りにくい表現も多々あるかとは思いますが、以下、小生の手にした第三版について、亦、疑問の点を書き記してみたいと思います。

（以下、『實地應用近世新奇術』第三版の書誌的事項の記述、及び同書の奥付の転記は省略する。本地注）

既に、御氣附のことと思いますが、訂正再版の日附が全く異なり、山口竹美氏の「日本映画書誌」ではその日附が「三十年十二月十七日」、今村三四夫氏の「日本映画文献史」及び先生の記事は「三十年一月二十日」そして小生の三版本では「三十年十二月廿七日」と、三種類があることとなります。

そして先生の、広告頁の記事に依る御推理（三十三年十一月以降の発行）にもかかわらず、「三十一年一月二十五日」の三版本が出現したこととなります、（広告に関しましては後に触れま

す）。
更には印刷者が、先生御所蔵の訂正再版本の『山口恒七』から『矢尾彌一郎』へと変更され、亦、『村上岡治』は、はっきりと『岡治』の活字が用いられています。『正価二十銭』の表記は全く消えてしま

います。
以上から考へますと、奥附に限っては、版の活字を全く組み替えていることになり、発行日の謎は更に深くなる計りのようです。

次に広告についてですが、先生の文中には「本書の末尾に8頁ほどの広告」となっていますが、小生のものは先にも記しましたように7頁であり、亦、問題の『石原時計店の…懐中時計』の広告なるものは三版本に全く見当りません。三版本の広告は全て、書物の広告で恐らくは「近世新奇術」の発行所から出たものと思われ

ます。
（以下、『實地應用近世新奇術』第三版本巻末広告7頁で取り上げられている書物名の記述は省略する。本地注）

此処までのところから察しましても、先生の御書きになりました『この本の発行が明治30年というのは誤りで…33年11月以後に発行したものなのである。』とは、小生には断言致しかねるように思われるのです。小生も職業上、明治期の刊行物の奥附に、いい加減なもの、（誤植も含めて）が多くありますことは存じておりますが、しかし広告の文中の日附も同様に疑いを持つ必要があると思われるのです。或は、先生の御所蔵の再版本は確かに33年11月以後の発行かも知れませんが、一方で、再版本の奥附の日に全く別の広告を附して発行した可能性も否定は出来な

いでしょう。現に、藤村の『若菜集』初版本には、現在迄、広告に全く別の二種類、そして全く広告の付かないものの合計三種類があることが確認されています。蛇足ではありますが、鉄寛の『毒草』は初版、二版、と出て次が四版となり三版本はありません。亦、『片袖』も三冊が揃とされていますが、某広告には四冊発行されているようにあります。

鉄寛の『川』と云う本も「明星」には確かに広告されたのですが現実には出版されませんでした。広告も一概に信頼しかねる一例であります。

小生『自動写真術』は未見ですが、此の「第三版本」から察しまして、「訂正再版本」は矢張り明治30年に刊行されたのではないかと推測するものです。
次に、表紙に関してですが、『映画史料発掘』118頁と『日本映画文献史』の写真頁を比較する限り全く同一と思われ

ますが、三版本は、文字の周囲の模様が明らかに異なるのです。（コピーを同封致しました）、文字の部分が同一であると思われるのに、何故、周囲の模様が変ってしまったのか？ 何とも不思議です。
以上、小生の気附きました点、幾つか並べてみましたが、つたない文章、乱筆、何卒御許し下さい。尚、まことにぶしつけな御願

手前勝手に恐縮でございますが、何卒、よろしく御願ひ申し上げます。

敬白

六月二十五日

本地陽彦

塚田嘉信様

追伸、

文章では御検討しにくい点等につきましては、拝眉の上で比較出来る機会がございますれば、小生いつでも現物を持参いたす所存です。

尚、小生の第三版本につきましては、広島友人が五月二十四日附の中国新聞夕刊の「でるた」と云うふコラムにて、亦、広島映画サークル誌「映画ファン」6月号にそれぞれ紹介記事を書いて呉れました。」

(注・3) 『日本映像学会映画文献資料研究会報 1』、「第一回聞き書き 塚田嘉信氏に訊く」(1992年11月10日、日本映像学会映画文献資料研究会刊)の中で、「塚田さんが映画をお好きになられたキッカケというのは何だったんですか。」という田島良一氏の問いに、「それは病気をし暇だったからですね。」と答えている。

(注・4) この鑑賞記録から公開記録へと発展したその成果は、意外なかたちで活字化へと結びつく。昭和30(1955)年になって、キネマ旬報社編集部の分裂、即ち清水千代太氏の退社に端を発した飯島正氏らキネマ旬報同人たちの執筆拒否による紙面の空白を埋める為に、急遽、当時の投稿欄である「旬報サロン」常連投稿者だった塚田氏に声が掛かり、この年の9月上旬号に「日本映画封切総目録」、9月下旬号に「外国映画封切総目録」として、敗戦後公開の内外の映画作品の公開日がリスト化、収録された。更には、10月上旬号掲載の、「内外映画作品題名総索引」をも含めて、『内外映画総目録 昭和20年8月15日—昭和30年8月14日』のタイトルで、『キネマ旬報・別冊』(昭和30年11月3日発行)として1冊に纏められた。尚、塚田氏自身は、『日本映像学会映画文献資料研究会報 1』、「第一回聞き書き 塚田嘉信氏に訊く」の中で、『キネマ旬報』の騒動があつて、この人たちがみんな出ちゃった。残ったのは田中純一郎さんと岡田さんだけ。旬報同人がいなくなっちゃった。だから8月号の原稿がないというわけです。その時に田中さんが戦後十年の目録を作れというわけよ。目録を作れといつても一週間くらいで作んなきゃならない。それで僕は呼ばれたんですよ。できますかというから、できますと答えた。こっちはメチャクチャ。(笑)それで作っちゃった。それで8月上旬号、8月の下旬号でしょう。で、9月上旬号の索引を作つて一月半もたしたわけですよ。」と語り、氏には珍しく、それぞれ一ヶ月早く、記憶を間違えている。また、9月上旬号の同誌の「編集室」という題名のこの号の「あとがき」には、「本号及び次号に掲載する「戦後十年封切映画表」は、本誌「旬報サロン」の常連塚田嘉信氏の丹念な調査を基礎にしたもので、内外映画五千本以上にわたる膨大な封切リストが、このように一挙に集録されることは、かつて見られない壮観であろう。」とある。塚田氏、25歳から26歳にかけての、最初の大きな仕事、成果の発表である。

(注・5) 鎌谷慶次氏は、『松竹七十年史』編纂当時は、「松竹株式会社関西支社・演劇制作室」の所属、肩書であった。塚田氏が社史編纂に取り組み始めた際に、関西方面の興行記録に関して何らかの問合せを関西支社宛てに差し出したところ、演劇興行課長の佐原信一氏から、「扱て御

訊ねの諸件ですが、このような古いことになると、私も全く不得手でございますし、よく解らぬものが、知った顔でいぢくり廻しましても、却って時間を徒らにかけ皆様に御苦勞を多くするようなことになりましても御迷惑と思しますので、このような面で最も適材であると思われる関西支社演劇製作室の鎌谷慶次氏を更めて御紹介申し上げます、氏は関西演劇史に就ての生字引のような方ですから、色々の面で御役に立つことゝ存じます」（昭和37年7月13日付）といった文面の返信が、社史編纂室の「田中純一郎様 塚田嘉信様」宛てで届く。当の鎌谷氏からも同日付で、「全面的にお手伝いしたいと思っております」との書簡が届き、以降、本格的に調査依頼がスタートする。鎌谷氏も演劇製作の多忙な実務の間隙を縫っての興行記録調査だった筈で、塚田氏、或いは田中純一郎氏との遣り取りも、当然乍らFAXやメールの登場以前のことだから、単純な要件は電話で済んだであろうが、多くは書簡を用いての作業、連絡であった。尚、鎌谷慶次氏は昭和51（1976）年3月（日付は不詳）に死去した。塚田氏宛ての鎌谷氏の書簡の引用に就いては、今日、書簡も著作権の対象となるので許諾を得る必要があるが、この稿の発表までに著作権継承者を捜し、且つ許可を得る作業が出来なかったことをお断りしておく。

- （注・6）塚田氏所蔵の『松竹七十年史』総革天金特製本には、奥付頁に「謹呈 松竹株式会社」の箋が貼られ、それにはタイプ印刷によって、「特別革製本五部の内の一冊 社史編纂室 塚田嘉信殿」と刷り込まれている。限定番号は「500」番である。また、古書市場でも殆ど見かけることのない、背の部分に「松竹七十年史」と書かれた題箋の貼られたダンボールの送り箱が付いている。群馬県太田市の新田図書館が所蔵する田中純一郎氏の旧蔵『松竹七十年史』5部本は、矢張り奥付頁に、「松竹七十年史は発行部数二、五〇〇部限定にして総布装なるも本特製本は総革表紙天金にして五部を製作し、大谷竹次郎、城戸四郎、大谷隆、田中純一郎、塚田嘉信の五人がこれを所有する、」と書かれた付箋が貼り込まれている。
- （注・7）橘弘一郎氏発行の『映画之友』は敗戦後の、昭和21（1946）年4月5日発行の4月号で復刊する。その後、昭和26年8月5日発行の第19巻第8号から『映画の友』と改題。昭和36（1961）年4月1日発行の第29巻第4号からは、それまでの「編集兼発行人橘弘一郎」が、「編集兼発行人石井康夫」に替り、昭和43（1968）年3月5日発行の第36巻第3号、通巻439号で廃刊する。
- （注・8）橘氏のレイアウトに関する著書は、『レイアウト 印刷・編集・割付』（昭和30年7月1日）、『レイアウト』（昭和32年10月8日再版）、『レイアウト教室』（昭和37年10月）の3冊で、いずれも印刷学会出版部刊。2冊目の奥付に「再版」とあるように、基本は最初の版を踏襲しているが、再版は「約三分の一強を書き直し」、3冊目は「全文を書き改めた」というものである。活版印刷時代では優れた手引書、参考書もであり、内容の図版も当然のこと乍らふんだんに海外映画のスター・ポートレートやスチール写真を使用した、現在でも充分楽しめる内容である。
- （注・9）財団法人日本近代文学館に収められた橘氏の谷崎コレクションは、『日本近代文学館所蔵資料目録 6 橘弘一郎収集 谷崎潤一郎文庫目録』（昭和57年9月25日、同館編集・発行）に記録されている。同書の解説によればコレクション内容は、「図書 248点 501冊、雑誌 33種 72冊、その他の資料 142点（切抜、アルバム他）」である。橘氏旧蔵資料にも、橘家と近代文学館と交わした契約書類の控が残る。尚、『文庫目録』の「解説」文末には、「橘家からは、潤一郎資料のほかに、『キネマ旬報』『映画旬報』の大正11年以降昭和29年までの大揃い170冊の寄託を受けている。」とある。「大揃い」とあるから合本での揃いであろうか。橘氏旧蔵資料にあるノートの記録によれば、「近代文学館」（寄託）▽キネマ旬報（第一期）

大正11年(86号)より 終刊(735号)まで (内欠号)523号、697号、700号、711号 ▽映画旬報(戦時中) 創刊号より終刊まで (内1冊不足 82号) ▽キネマ旬報(戦后第三期) 合本は揃わず (これは除外する)」とある。「除外する」とした戦後のものも、結果として寄託に含めたのであろう。

(注・10)「京屋襟店」は、大正11(1922)年12月30日に封切られた後、田中栄三著『映畫脚本 京屋襟店』として大正13(1924)年8月15日に新潮社から上梓された。この時点で既に、脚本(台本)そのままではなく、読み物となるように削除や加筆があるが、それも恐らくは田中栄三氏自身の手によるものと思われる。戦後、『キネマ旬報』別冊の「日本映画代表シナリオ集」第3巻(昭和33年5月5日刊)に収録された際には、小林勝氏による「前言」として、以下の解説が添えられている。

「シナリオ「京屋襟店」は、一九二二年の作であるが、撮影台本は今日残っていない。一九二四年に、作者が読みものシナリオとして書直して出版したものが残っているのみで、一七八頁に及び一大長篇である。そのままでは頁数の関係で納めきれないので、作者に手を入れてもらって、もとの撮影台本に近いものに復元するとよかったのであるが、あいにく田中栄三氏が視力を弱くされて、短縮を一任されたので、僭越ながら私がいろいろと原作の味を残すことに努めたのである。とくに、「夏の巻」「秋の巻」はかんたんな筋書きにしてみましたけれども、「正月の巻」のはじめの方や「冬の巻」のラストは、ほとんど原作の味、即ち田中栄三氏の持ち味を試し得たと思っている。

しかし、短縮の方針やアレンジメントは、すべて私の独断によるものであることから、それらの責任はすべて私にある。」

昭和48(1973)年12月発行の『日本シナリオ大系』第一巻に収録されたものも、この「日本映画代表シナリオ集」をテキストとし、同時に小林勝氏の解説も、「京屋襟店」のシナリオについて」の題名でそのまま収録されている。巻末の岸松雄氏による「解説」も、テキストに就いては小林氏の文章を踏襲、引用する形に留まる。

(注・11)塚田氏の蔵書中、以下の国会図書館の「新聞目録」がある。『国立国会図書館所蔵 新聞目録(昭和44年11月1日現在)』(昭和45年3月20日、国立国会図書館閲覧部編、同図書館刊)、『国立国会図書館所蔵 新聞目録(昭和55年12月末現在)』(昭和56年3月28日、国立国会図書館閲覧部編、同図書館刊)。尚、前者は、昭和51(1976)年9月3日に大山堂書店から2200円で、また後者は、昭和57(1982)年8月27日に名雲書店から3500円で、それぞれ購入している。

(注・12)細谷勝雄氏には以下のような私家版がある。『日本映画監督別目録』(昭和37年2月25日、映画資料研究会、50部限定)、『日本映画索引』(昭和39年1月10日、新映社、20部限定)、『東宝映画一覧表』(昭和40年4月10日)、『日本映画索引 原作者別』(昭和41年8月15日、100部限定)、『日本映画索引』(昭和62年11月20日、100部限定)、『日本映画索引』(平成5年5月18日、創栄出版)。

(注・13)「銀座復興」は、そもそもは水上瀧太郎氏の小説である。『水上瀧太郎全集』(昭和16年8月、岩波書店刊)第7巻に収録されているが、巻末に収められた平松幹夫氏による「後記」によれば、この作品は「昭和六年三月十五日から同年四月十六日まで、三十二回に亘って「都新聞」の朝刊紙上に掲載されたもので、このうち、四月四日は新聞紙の休刊で一回休んでゐる。創作集「遺産」に収めらる。」とある。この原作小説を、久保田万太郎氏が脚色し、自ら演出したのが帝国劇場の舞台作品である。当の久保田万太郎氏自身は、この作品名がそのまま

書名となった『銀座復興』（昭和22年7月、演劇文化社刊）の「あとがき」で、「昭和十九年の二三月ごろから五月にかけて執筆、しばらく休刊をつづけてみた「三田文学」の再出発を記念するつもりもふくめて、毎月、一トまくづゝ連載して行つた。」と書いている。収録戯曲本文の末尾には「（昭和十九年五月一十一月）」とあるから、これが掲載月と思われる。私の手許には同誌の昭和19年9月号しかないが、この号には「その三」が掲載され、更に万太郎の「編集後記」には、「その三」の前号は一回休んだが、「その四」を書き終えて編集委員会に渡し、続けて「その五」にとりかかる、とあるので「その四」が10月号に、「その五」が11月号に掲載されてた、ということであろう。

雑誌『演劇界』の、1998（平成10）年10月に掲載された、吉村昭氏による『銀座復興』の思い出には、「この戯曲の作者は、昭和十五年に死去した東京生れの作家水上瀧太郎氏で、関東大震災で店を焼かれた銀座の料理店の主人が、焼野ヶ原の中で苦勞の末、店を再興するという筋である。この戯曲を久保田氏が、関東大震災後の銀座を空襲後の銀座とかえて脚色したのである。」とある。水上氏の原作は戯曲ではなく、前述した通り小説だが、続けて、「主人公の店主を演じたのは、六代目尾上菊五郎であった。ふところの深いおらかな演技で、菊五郎が舞台に出てくると、桜の花が一斉に開花するように華やぐ。～（中略）～終戦後、自信を喪失していた観客は、この芝居の菊五郎演じる主人公のように努力して逞しく生きてゆこうという希望をいだいたはずである。観客の表情は明るく、笑い声もさかんに起った。いい芝居だ、と私は思った。」と書いている。だがしかし、万太郎氏自身は、『銀座復興』の「あとがき」に、続けて「この上演は、必ずしもこの作を生かさなかつた。」としている。つまり、戯曲通りの上演ではないと断っている。戌井市郎氏によれば、「帝劇公演は東宝が主催者だから出し物については東宝が菊五郎と相談して決めたのだと思う」（『銀座復興』のことなど、『演劇界』2002年4月号所収）としているが、万太郎氏も「あとがき」で、「わたくしは、演出者として、慎重且つ勇敢なその企畫に協力する義務を感じた。すくなくも失敗してはならないと思つた。それには、どこまでもこれは、六代目の野口文吉役に重點を置く演出を試みるべきだと思つた。……すなはち演出者としてのわたくしは、作者としてのわたくしに因果をふくめ、とくに文吉をもつて主役とし、～（中略）～その結果、自然入用のなくなつた「その四」を削り、その一部分文吉に關するくだりを「その三」に嵌めこんだり」と言つた手直しをし、幕切れも六代目の希望で出来た、としている。戌井氏も指摘していることだが、この為であろう、当日のプログラムには「水上瀧太郎原作、久保田万太郎脚色、久保田万太郎演出、尾上菊五郎演出」とあって、万太郎氏と六代目の共同演出という表記になっている。この点も、『帝劇の五十年』収録の興行年表には「水上瀧太郎原作、久保田万太郎脚色・演出」という記載だけであり、この記録からも、プログラムは尚更重要である。因みに、「銀座復興」が、今日、舞台に掛かることは稀だが、平成28（2016）年6月19日、三越劇場でたった1回だけ「花形新派公演」として上演された。私もこの日、新派文芸部の成瀬芳一氏構成・演出による舞台を2階席から見たが、迂闊にも久保田万太郎氏の戯曲との比較を怠つた（同年9月13日、新橋演舞場の地下特設会場でも1回だけ上演された）。

- （注・14）この水野一二三氏旧蔵のスクラップ・ブックに、『興行情報』というタブロイド版の業界紙が挟み込まれており、そのうちの昭和26（1951）年8月19日発行のNo.323の紙面に、「ヒロのシマ（ママ）人々に供養する（完）」と題した記事を水野氏が書いていて、中で自身の被爆状況を次のように報告している。「原爆落下の瞬間、私は家財道具の下敷となつて次第に意識が朦朧として来た。あのまゝだつたら私は無意識のうちに焼死したことだつたらう。そ

の私が、意識を取戻したのは、倒れている私を見て、ワツと泣声をあげた子供等の叫び声だったのです。やつと起上つた私は、頭から顔半分、肩一面、右横腹に大火傷を負い、胸部、腹部大腿部に、大小無数の裂傷を負い流血は全身を紅に染めていた。見れば向い側の家から火を発している一刻の猶予も出来ない。妻は勤労奉仕に出たあとであり、私は取敢えず子供等を連れて避難した。」。水野一三氏が、あの原爆禍を生き延びることが出来たのは、正に奇跡的だったことが判る。